家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第八十三巻第十二号
日本幼稚園協会

12

障害をもつ子どもの保育

幼稚園における心身に障害をもつ幼児の指導事例集

障害をもつ幼児を受け入れる心構えと、指導の事例を豊富に提供!!

本書は、障害をもつ幼児に対する指導のあり方や、受け入れに当たっての考え方など、基本的なポイントを示したものです。各地の幼稚園の指導事例が、豊富に紹介されていますので、実際の保育指導に大へん役立ちます。

- 情緒障害、精神発達遅滞、視覚障害、肢体不自由、聴覚障害、などの障害をもつ幼児の指導の実際を紹介。

文部省・著

A５判・184頁・定価90円

障害児の娘と保育の仕事と

重い脳性まひの娘をもって保育園をつくった保母の記録

重症の小児まひ児をもったひとりの母が絶望のどん底から這い上がり、保育の仕事を通じて生きることの尊さを知った。やさしくも大きくたくましく生きる人間の記録である。障害児指導の関係者ばかりでなく、すべての人に読んでほしい書。

土屋多喜栄・著

B６判・256頁・定価1,000円

障害児保育の現場から

障害児保育を模索しつつとりくんでいる保育者たちの座談会

障害児保育の考え方や、具体的な保育の方法について、現場の保育者が事例を軸に語り合う。身辺自立・歩行・ことば・健常児との関係を育てるポイントは何か。親に接する際の配慮すべき点は何か。重度児の保育をどう考えればよいか……。発達理論を学び、目の前の子どもに学びつつ辿った現場ならではの悩み、迷い、感動がいきいき伝わってきます。

新沢誠治・編著

B６判・336頁・定価1,200円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心を大切に　子どもの明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第八十三巻　第十二号

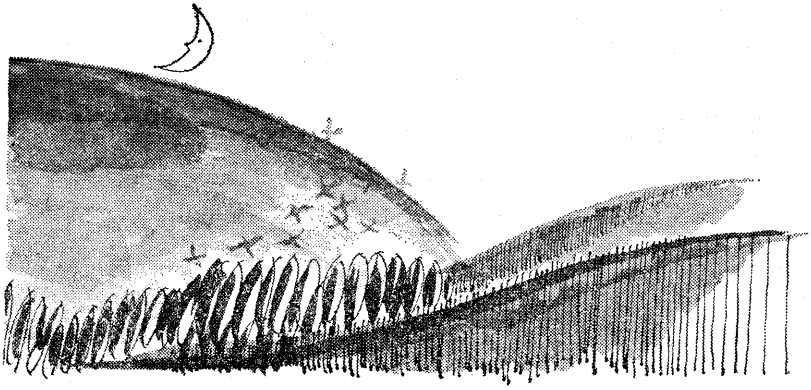
幼児の教育　目次

——第八十三巻　十二月号——

みえない世界のことを……河辺　昇…(4)
詩　こんなにも……矢崎節夫…(6)
私の幼児教育論（下）……高杉自子…(8)

園長室の窓から
バス送迎の諸問題……原口純子…(16)
いろいろなことを教えてくれる子どもたち(6)
……村石京子…(20)
近代短歌に現われた子ども(二十一)……大塚雅彦…(24)

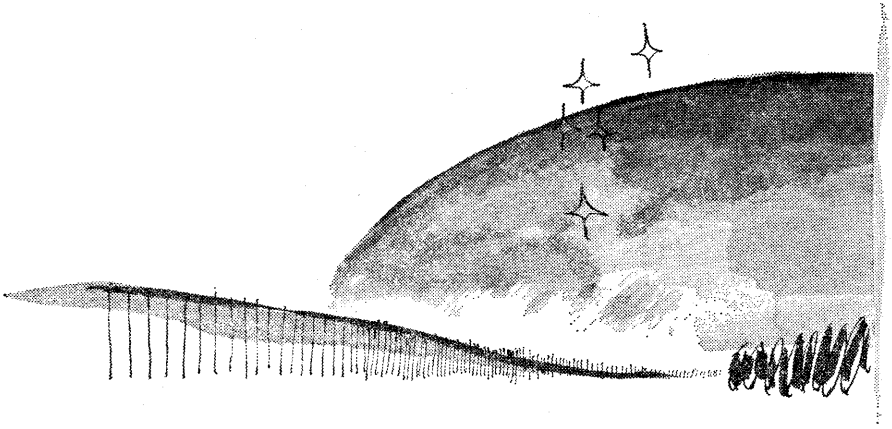
© 1984
日本幼稚園協会



保育実習生のノートから①……（32）
ブリューゲルの「子供の遊戯」14
——西洋美術史にみられる〝子供の遊戯〟小史——……森　洋子…（34）
書評　『自我のめばえ』……友定啓子…（53）
兎園随筆④
——園児たちの家出——……蕪木寿江…（58）
第八十三巻総目録……（61）

編集主任　本田　和子・皆川美恵子
編集委員　外山滋比古・田中三保子
村田　修子

表　紙・安井　淡
表紙題字・比田井和子
カット・福田　理恵



みえない世界のことを

河辺　杲

暑かった夏の終りのある日、劇団「風の子」の演ずる「ぼくのなかのぼく」という作品を観劇していろいろ感じさせられた。この作品は身体のしくみを通して人間のあり方をさぐるというテーマで今こそ生きることのすばらしさを子どもたち（大人もふくめ）に訴えたいという願いがこめられていた。近年子どもたちの身体にいろいろな変化が見られ、幼稚園でころんでも手が働かなくて顔をぶっつけてしまう子、ちょっとしたことですぐ骨折をする子などが見られたり、また神経性胃炎の子どもが年々増加しつつあることなどが小児科医によって報告されている。子どもの身体は一体どうなって来ているのかという問題への警告とも受けとれた。この作品ではA少年が学校の校舎から落ちるという事故を契機にこのA少年のからだのしくみについて探究をはじめ脳の機能から神経や精神の働きにまで及んで身体と心のつながりについてこれを発見し理解していくという筋書きであった。こう言ってしまえば生理学入門のようであるが、例えば私たちが立ったり坐ったりしているということに全身四百幾らかの神経がとっさに統一的に働くということの不可思議さを考えるとはじめに立つという気持ちがあり、その気持ちはさまざまで立つという動作は情緒の表現だとも考えられることに気づかせようと演出に苦心がなされていたところに感動したのである。

すなわち、みえている世界としてのからだの働きとみえない世界としての心の働きのつながりの問題に迫ろうという極めて意欲的、画期的でまた新しい演出の創意に溢れる作品に児童文化の今日性をあらためて考えさせられると共に観客の中の子どもたち

の反応ぶりからこの真剣なとりくみによって子どもたちをして自分のからだや生命の大切さに気づかしめるに充分であったように思われた。

ひるがえってこの「みえている世界」と「みえない世界」の両分野のバランスやつながりについて教育や保育に即して考えてみると最も弱く不足しているのではないかと考えさせられたのである。

この作品の中では六、七人の演者がそれぞれA少年の心の色を表現し、ゆれ動く心の葛藤場面を演出していた。そこにはサイコドラマやロールプレイの原理に近い状況が見られた。

保育実践の場でも「その子どもの立場になってみる」という人間理解のあり方が屢々問題となっているが、なにかそれへのとりくみにもう一つ手の届かないもどかしさを感じるのは私だけであろうか。子どもと保育者の関係においてだけでなく、子どもが人間関係を学んでいく過程でこのことにもっと深い探求が必要のように思う。

いまひとつこれに関連して考えられることは「他人受容」については考えられても「自己受容」についての追求が弱いのではなかろうか。相手の心もちが感じとれるためには先ず自分自身の心の動きがキャッチされなければならない。一度各自が自分の感情についてどのように話しているか。また他の人々が自分の感情についてどのように言っているのかをよく気をつけて聴かしていただいたらどうだろうか。「感情を抜きにして理性的な話し合いをしよう」とか「客観的になろう」とか「感情をむき出しにしないで」などと言って何とかして自分の感情を無視するか否定することに非常な努力を重ね、また他人の感情をも無視するか否定するかしようと一生懸命になっているのではなかろうか。感情の否定や無視は感情をコントロールすることもあきらめることになっているのである。

一九八四年を送るにあたり、静かに「見えていない世界」や「自己受容」について再確認し、新しい年への課題としたいと思う。

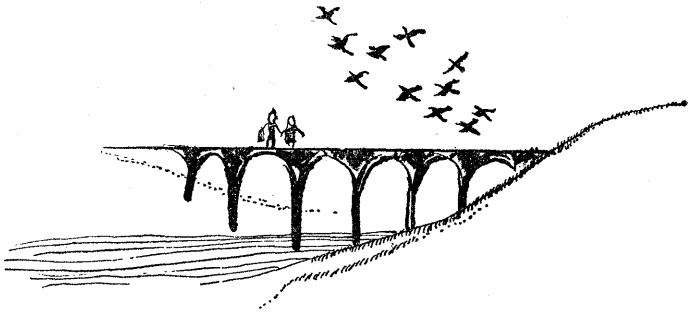
（洗足学園短期大学）

こんなにも

矢崎　節夫

アマゾンの木を
みんな切ったら
地球の酸素は
なくなるんだって　と
新聞を読みながら　おとうさんがいった

木や草は炭酸ガスをすって酸素をだすとは



理科の先生にも習ったけれど

ほんとうは
きのう　公園の木に
ぶらさがってて　折っちゃったとき
だれかが　どこかで
ちょっぴり
息苦しくなっていたかもしれなかったんだ

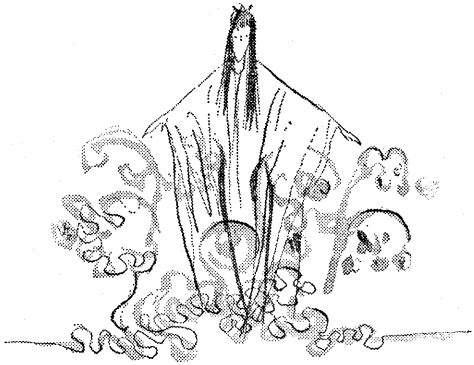
ぼくは　びっくりして
それから　はずかしくなった

ぼくたちを
生かしてくれているものが
こんなにも近くにいたのに
こんなにも遠くにしか　思っていなかったことが

私の幼児教育論（下）

高杉自子

今年の夏休みに出た研修会で、小学校の先生方の声を聞く機会を得た。今までになく小学校の先生方の関心が高まってきたことは喜ばしいと思ったが、幼稚園教育をわかってもらうことは大変なことだということも知らされた。それにしても、幼稚園教育の中に入りこんだ小学校式の保育の根深さの方が問題なのではないか。問題はむしろ、こちら側にあるのではないかと心寒い思いをしたことも事実である。



教育という名がついたばかりに

ある幼稚園の「水遊び」と称する活動は、小学校の低学年のプールを借りて行われた。

水の深さは二十糎位のところを、五歳児の幼児たちがパンツ一つで静かに入る。水の中を前へ向ったり後向き

になったりして歩く。並んだりする。その日は、パンツをぬらしてはいけないのである。大きな満々とたたえた水の中をその日は歩くだけである。水に入りたい幼児はふざけて転んでわざとぬれる。すると、他の子どもたちが「ぼくのパンツぬれてないもの」と叫ぶ。

それから、プールのふちにあがり、少し休んだ後、洗済のチューブを手に、プールに入り水を入れ、一列に並んで、その水鉄砲の水がどの位とぶか競争をした。全部先生の指示通りに動いた。

その幼稚園は、水遊びの時はパンツで、水泳の時は水着を着るという。

驚いたのは、その日に行われた活動が「水遊び」ということである。どこが遊びなのか、耳と目を疑ってしまった。そして、先生方がそうしたことを平気で行い、自分のしていることに何ら疑問を持たないのは、小学校にいるからなのかと、空恐しくなった。それにしても可愛そうな子どもたち、全く遊びを知らないで育ってしまうのではないか。

大きなプールを歩くだけでは、何とも、つまらないだろう。転んでわざと水にぬれる子どもの方が救いがある。それなのに、先生のいう通りに「ぼくぬれないもの」といい子ぶる子どもたちに育ってしまってよいものか。

私は、このような幼稚園をみると、教育と名を幼児期につけない方がよいのではないかと思うのである。

いつか、ある幼稚園と保育園が同じ施設の中で幼保一元化の試みをしている所を見学した時のことである。その時の教育長さんが私に胸を張って「ここは教育をしています。二歳から五歳まで一斉指導をきちんとしています」というのである。鳥はだが立つ思いをした。二歳から五歳まで五年間も統制された生活に馴らされて、一体、正常に育つのであろうか。このような危惧は、この頃、保育所の中には幼稚園に負けず教育をするといって、一斉に段階的に特訓をしている所があると聞くのであるが、これも教育という名の災いである。

なぜ、誰もが教育というと、小学校以上の授業のイメージしかわかないのか。

系統的、意図的教育というと、先の事例のようにきょうは歩くだけ、次はしゃがむだけというような指導になってしまうのか。一体、そんなことをして、何が身につくのであろうか。教師が教えなくてはならないことなのか。教師の乏しい指導故に、退屈であきあきする授業を行って、その方向に幼児を調教しているとしか思えないこのような姿に、私は怒りのようなものさえ感じてしまうのである。それに合わせていく健気な子どもたちに同情せざるを得ない。

ところが、そうしたわくの中に子どもをはめることこそ進歩と考え、科学的と考える人の方が多いのである。そうしたわくを、細かく段階的につくり、そのわくの中にはめこんで、教師の指示通りに行わせて足並みを揃えていかなければ教育ではないと考える人口の方がずっと多いのはなぜか。たしかに、知識や技術を短期間に身につけさせるためには、その方がよいであろう。そして、人間一生のうちには、そうした教育を受けなければならない時もあってよいと思う。

しかし、幼児期の教育はそれでよいのか。

ある幼稚園で、畑のじゃがいもを掘った時の感動を十分に味わわせたいと思い特に指示をしなかった。Bクラスの担任は、指示通りに行動させないと気持のわるい担任なので、すぐに取ったじゃがいもを袋につめさせた。Aクラスの子どもたちは、畠のふちにじゃがいもを並べ出した。どの位、自分たちはとったのかということを知りたいために一列に並べた。

その並べ方も大きい順に並べたのだ。そして数え出した。そして歓声をあげて、自分たちの収穫を確認し、そのじゃがいもを、ポケットに入れたり、手にもったりして持ち帰ったという。袋には入れたくないのだそうである。自分たちのじゃがいもを自分たちの体で確認したかったのであろう。もちろん、その畠は園の近くである。

こうした事例でわかるように、幼児の活動の内容の深さは、一斉に行ったからといって保障されるものではない。むしろ、管理的先生より幼児の発想の方がずっと豊

かであるとも言える。それに、AクラスとBクラスの日頃の担任の指導の成果が現われることである。Aクラスは、自分たちの発想が十分に認められ生かされる経験をしてきているから、意欲的に活動するように育っているのである。Bクラスは指示通りに動くことを善しと育てられるために、その範囲を出ないのである。見た目にも整然として、始末のよいはみ出しのない管理の行き届いた集団行動のとれるクラスとして育っているのである。

幼稚園と小学校の溝

ある研究会で、幼稚園の先生が、おもちゃ作りの事例を出した。一年保育の五歳の十二月お店ごっこがクラスの中に広まっていった時、ある幼児が、空箱の中に丸いすじのパックが入っているのをみつけ、それに穴をあけ、心棒を通して、抽せん機を作ることを思いついた。その子はその子なりに、それが回転するように、トイレットペーパーの心棒をはめこみ、その中に棒をさしこみ、さらに棒を固定させた。そしてふたをして、玉の出る穴をつくり取手もつけて試行を重ね本当の抽せん機のようにできた。

それがクラスの人気を呼んで、皆が並んでそれをまわしたし、景品も次々と作って楽しむことができた。日頃、友だち間の中で存在の薄かったその子は、そのことがきっかけで友だちもできたし、クラスの中でも認められるようになった。幼児は、回転するものに興味をもつ。車などを作る活動もあるが、その一連として、このような発想もするという事例であった。

すると、小学校の先生から「何パーセントの幼児が、そのような活動ができるか、それを受けて小学校はどのような理科の指導をしたらよいか」という質問がでた。更に、指導者からは「それは社会事象の真似であって理科とは言えない。領域自然の事例でもない。そうしたごっこでは、領域〝自然〟にはならない。そんな一人の幼児の思いつきで活動した事例は何の参加にもならない」という発言があった。

ここで、小学校と幼稚園の間には、大きな溝があることがわかった。

小学校では何パーセントの幼児ができるか、できないかが問題なのである。そして、一部の子どもの活動では意味がないのである。それを取りあげる方がおかしいと言うのだ。全員が一様に知識技能を身につけるのでなければ教育活動として認めないと言うのである。

しかも、何かの教科に属していなければならないし、学年のレベルが決っていて、それ以上では扱うことができないらしい。

幼稚園では、まず評価は、できたかできないかではない。全員の幼児がすしのパックで抽せん機を作らなければならないなどとは毛頭思っていない。しかも、その理由をわからせるわけではないのである。幼児が身の廻りの事象から、興味をもって取り入れて、自分なりに試行や工夫を重ねて実現していくこと自体に意味を求めているのである。それはその子なりの理解度に応じた思考活動であるから、例えば、A、B、C……というそれぞれの幼児が、それぞれの自分の力が発揮されればよいことなのである。それぞれの幼児が自分のイメージなり課題をもち、その実現に向ってチャレンジし、その子なりの発想、発見、工夫など試行を重ねながら、その実現に向って努力することが大切だと考えている。したがって「作ったものを使って遊ぶ」とか「遊びに使うものを作る」という活動であり、その中の「動くものを作る」という活動になる。動くという現象、動かすエネルギーとか、動力に対する興味や関心をもち、そうした観点からものを見る見方や操作をすることを考え、それを楽しみ、多様さを経験する方がよいと考えるのである。

例えば、そのクラスでは抽せん機を皆が興味や関心をもって操作したことで、新たな刺激を受けたことであろう。しかし更に大切なのは、そのことが、その幼児のクラスにおける位置を獲得したことの意味の方が大きい。

更に、その抽せん機は、系列的にとらえるならば回転するものと作るという所へ入るだろうという意味である。

幼児に適切な「課題と、素材と、人間関係」があれば、幼児は、すばらしいものを、その幼児らしく実現するという証しでもある。

教師の予期以上の独創的な活動をし、その中で、多くの経験を得るという事が言いたかった事例である。

もちろん、そうした活動は、自然とか社会に属するものではない。したがって理科ではない、理科であってはならないとも言えよう。

幼稚園における活動は「○○領域の活動」と言われるものではなく、一つの活動を行う中でも、いろいろなねらいが達成されるという性格をもっている。この抽せん機は社会事象の中からとり出したものであっても、その中には自然も、社会も、絵画製作のねらいがふくまれている。即ち総合されているのである。作り試す段階では、素材の活用は絵画製作であるが、自然の理法と取り組んでいるわけで、それは当然、やがては小学校の理科へとつながるものであろう、ということは言えそうである。

しかし、この事例での指導者はこうした幼稚園の領域の考えは、あいまいとしか考えない。総合、総合ということは、ごまかしだというのである。

このような考え方は結構、幼稚園の先生方や指導者の中にでももっている人が多い。領域別カリキュラムによる指導を展開している人たちで、かなり根深いかもしれない。その人たちの総合は、ねらいの群として領域をとらえているのではなくて活動の群として領域をとらえているのである。

活動が、○○領域に属することをはっきりさせる必要がある。それが教育要領の趣旨だとすら考えているのである。余談であるが、教材や教育雑誌、番組等で幼稚園教育要領準拠と宣伝されたものは、殆どこの考え方であった。

ところが教育要領の言いたいところは幼児の生活経験に即して、総合的な指導を行うと言い「六領域の事項を組織して具体的総合的な経験や活動を選択配列する」と示してあるわけである。だから例えば、うさぎを飼うと

いう自然の活動の他に、うさぎの絵をかくという造形活動、うさぎの話を聞く、話し合うという言語活動、うさぎの歌を歌うという音楽リズム、兎になって跳ぶという健康領域、あるいはうさぎの劇をつくるという言語活動をよせ集めて総合的に発展させた、という考えではない。このような考え方は、領域と教科は違うと言いながら、教科的発想と全く同じである。それらを寄せ集めて単元を作り、それが幼児に適していると決めているが、果して幼児に適しているのか。

総合的という意味はむしろ生活ということである。幼児の生活を見れば、今は自然、今は絵画製作などと意識していない。それこそ、うさぎを観察していても、歌をうたいながらみている幼児も、見たことを言語表現している幼児も、友だちと安定している幼児もいる。動物を観察しながら、親しみを感じたり、食べものをやりたいと考えたり、なぜ目が赤いのかと考えたり、それも一人一人の幼児によって、育つ内容は違う。

そうした個人々々の違った受けとめ方を大切にして、更に皆で話し合ったり作業をしたりする場面を通して、それが交換され、あるいは深め高め合って共有するものも生まれてくるのである。むしろ、そのための場や機会、あるいは時間をたっぷりもつ方に意味があると考える。

早く揃えるのではなく、むしろ違った方がよい。人間同士の多様さを知るからである。だからこそ、共感することが貴重なのである。共感する喜びは、皆、それぞれが違っているという前提があって生きてくるのではないか。それなのに、教育は、やたらに共有を急ぎ、やたらに共感を強いる。同じ考え方や感じ方をしないと異端者扱いを受ける。

保育者の自己改革を

現在の学校に見られるように、揃えて能率的に一率の内容を次々と埋めこみ、更に企業がまた、それに輪をかけて決められた歯車をつくり運行させているならば、いっそ、それに合う人間を育てた方がよいのかと考えさせ

られる。

しかし私は、そこで居直りたいと思う。だからこそ、幼児期は一人一人を一色で塗りつぶすようなことをしてはならないと思うのである。一人一人の幼児が自分の存在する喜びと実在感をまず得ることが大切なのではないか。

揃える教育があってもいいが、揃えない教育もあってよいのではないか。

かけがえのない世の中のたった一つの生命としての一人一人を、こよなく愛し、大切にする場があってもよいのではないか。

自分が他と同じようにしなければならないと思う前に、同じようにしたいという願望と必要感をもつことの方が先決ではないか。

それに、人間というのは本当に個人差があるのではないか、幼児期の個人差は大きいという。しかし老人の個人差の方がもっと大きいのではないか。学校や会社などの組織体に入っていると個人差は見えない。それは個人差がないのではなく、揃ったのではなく、見えないのではないか。

つまり何をどう教えるかの方が、個々の子どもが何をどう身につけるかよりも重大なのである。子どもは一人一人の自分を表明したいのに、それが見えないから、子どもたちはいらだつのではないか。

幼児一人一人が、その幼児らしく生きる場、生かされる場を停滞し、そしてその生き方と生きがいを求める幼児を育てるための方策を練ることが、幼児の教育を受けもつものの急務である。まわりにふりまわされることなく、保育者が一人ひとりの幼児の代弁者となって、一人一人の幼児の歩みを一歩ずつ確実に踏み固める力をもつための援助を惜しまないことを期待したい。一人一人の保育者の生き甲斐に胸をはり、自己改革に挑むことがそれをもたらすのではなかろうか。

（文部省初等教育局視学官）

◇園長室の窓から

バス送迎の諸問題

原口純子

四月に異動して来た当園は園児数百八十人（年少・年長各三クラス計六クラス）で、バス送迎がある。約九十名の子どもを三方向に、一台のバスを三回運行している。バスの所要時間は一回二十分、合計一時間かかる。バスの乗務に当るのは学級担任である。

☆先生のいない保育室

「おはようございます」と子どもが元気に部屋にかけ込んで来ても、バス当番の先生のクラスには「おはよう○○君」と迎えてくれる先生はいない。帽子やかばんを片付けて〝出席ノート〟にシールをはろうとするが、どこにはっていいかわからずシールを持ってうろうろする。机の上には絵具や粘土などその日の活動が準備されているが、先生の声や姿なしには意欲がわかず、床にひろげてあったブロックの

ところに行って、他の子がすわりこんで何かを作っているのに、そばに行って足でブロックをけちらしたりする。陽子の持って来たシャクヤクの花たばも、受けとってもらえず、机の上に置いたままになっている。次々に登園する子どもたちは外に出たり、廊下に出たり、プレイルームに行ったり、部屋でうろうろしたりしてとりとめもなく四十分間を過し、ひたすら担任の来るのを待っている。どんなに整った保育室でも、担任が待ち受けてくれない保育室はうつろで、暗くむなしい。

担任の先生と子どもの朝の出合いは一日の保育をスタートさせる大切な瞬間である。教師は子どもの表情や全体から身心の健康を見定める。昨日けんかをしてくやしい気持で帰った道夫はどんな表情で来るか気にかかるし、来るなり「わたし今日おたん生日、六歳になったの」と報告する恵子のうれしい気持も受けとめ、祝福してあげたい。保育は歌や遊戯を教えることではなく、日々のささいな出合いや言葉かけの蓄積の中にこそ相手を育てるものがあることを思えば、朝の出合いは誰でもよいとは思えない。したがって見廻りのローテーションを組んで安全の確保のみを目的としたバス待ちの保育は納得できないし、まして誰もいない部屋に子どもを迎えることはしたくない。

☆必要悪

全国にバス送迎をしている園はどのぐらいあり、その乗務は誰が当っているのだろうか。近ごろ、子どもの絶対数の減少に伴い、バスは主として、経営上の理由から園の必需品となっている。遠くまでバスは走りまわり軒々に止って子どもを集める。園によっては、始めに乗った子は一時間近くバスに乗りっぱなしで隣の市や村も走りまわることもある。

幼稚園は本来幼児が歩いていける距離が望ましいと思う。それができない場合にやむをえず通園バスを使用するものであり、バスは必要悪で、無いにこ

したことはない。バスを運行するならそれに見合った行政上の配慮、とりわけ乗務の人員の配置をしない限り、バスによって生ずるさまざまな問題は解決しない。

☆バス送迎の問題点

いかにさまざまな情報を聞いていても、実際に事に当り、当事者になってみないと、事の本質は知りがたいものである。

今まで何度も、バス送迎のある園は大変だという話を聞いていた。その主な理由は、

① バス乗務は疲れる。バスで子どもを迎えに行き、保育を一日行い、さらにバスで子どもを送ることは、確かに負担である。三コースも続けて乗ると体調の悪い日はバス酔を起こしたりすることもある。

② バス待ちの子どもの保育が容易でない。降園後二回目、三回目のバスを待つ五十六人の子どもを四十分間にわたって保育しなければならない。子ども達は放課後で気がゆるんでいたり、遊び疲れていたりする。しかもクラスも学年も入りまじった約五十人の集団である。これを安全に見守ることは、学級集団の保育とは異なった気骨の折れる仕事である。ケガや事故もこの時間帯に起こることが多い。

③ 研修や教材研究の時間がとれない。

④ バスのある園は無い園に比較してはるかに負担が大きいのに乗務手当が一ヵ月二千円というのは安すぎる。

などというように、主として保育者側の負担の問題として受けとめていた。しかし、私の目からは、担任を持つ教諭が日々バス乗務をすることの問題点は、教諭が疲れるとか、乗務手当の問題ではない。むしろ子どもにとって毎日どこかのクラスが教師なしに朝の四十分間もの間放置され、放課後も合併にしてバス待ち保育をすることにある。子どもにとって望ましくないということこそ、最大の問題点であ

る。

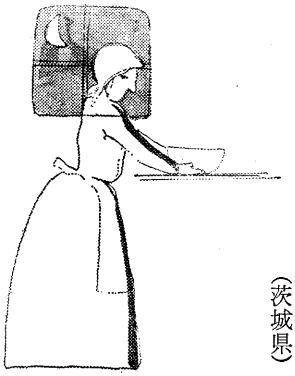
もっとも今まで朝の四十分間もの間完全に放置していたわけではない。年長三人の担任が、手分けして、一人はバス、一人は園庭、一人は園舎内を見廻る、という具合に役割分担をしていたという。しかし「保育」というものは、見廻る程度のものではない。

幼稚園で自習をさせていると聞いたなら誰でも驚かれるだろう。しかし、担任がバス乗務することは、子どもにその間自習させているようなものである。仮に、小学校に送迎バスがあり、担任の先生が交替でバス乗務することになっていて、一年生のどこかのクラスが一時間目はいつも自習になっていたらどうであろう。校長はこのことを放置するだろうか。教育委員会も、担任が交替でバスに乗りなさいとか、担任がバスでいないクラスはとなりの組の先生が見なさいと言うだろうか。父母もしかたがないと放っておくだろうか。幼稚園での教諭のバス乗務はこのような状況と同じ性質のものである。

担任は朝、子どもを部屋でしっかり迎え、充実した保育をして欲しいと願えば、結局、主任か園長がバスに乗務することになる。園長や主任が毎日交替でバス乗務しなければならないということは、本来の任務を棚上げした上でなければ不可能である。

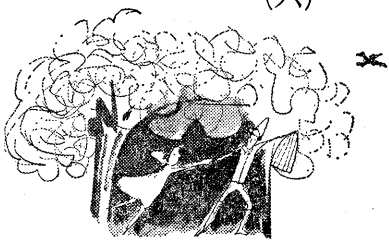
バスを持つ園の望ましくない大かたの問題は専従の乗務員が確保されることによってすぐに解決可能である。しっかりした時間差保育を実施するには、それなりの人員の配置が必要なのである。

（茨城県）



いろいろなことを教えてくれる子どもたち（六）

村石京子



ブランコ　二題

今月は子どもたちの大好きなブランコから、話題を二つばかりひろってみたいと思います。幼稚園が始まったばかりの四月、五月の頃はブランコはいつも満員でした。「乗ろうと思っても誰もかわってくれない」とか、「先生、押してェ」とかいう声がよく聞こえてくるのもこの頃です。

「ブランコは代りばんに乗りましょうね」「よく止まってから降りるのよ」「ブランコの前を通ると危ないのよ。後から気をつけてまわっていらっしゃい」などと毎日々々くりかえし言っています。それでも時々ブランコがぶつかったのと言って泣き顔で保育室にもどってくる子どももあれば、押してあげ

ても押してあげても、もっともっととせがむ子どももいて、腕がだるくなってしまうようなくりかえしです。ブランコはちょっと危なくても、なかなか順番がこなくても、子どもたちにとって思う存分こぐことで体に伝わってくる充実感や、その振幅に身をまかせてゆったりと過ごす一時の心地よさというものは、他の遊具では得られない大きな魅力ある存在なのでしょう。

そしていつも行列だったブランコが少し空く時期があります。それは子どもたちが、グループであそぶことの楽しさを知ったときです。例えば、砂場に思う存分水を注ぎながら協力してつくり上げていく川やダム工事であったり、高鬼やリレーなどが盛んになる頃であったりします。今までの二、三人であそんでいたブランコあそびと、みんなであそぶダイナミックな動きのあるあそび、つくりあげたり、移り変りの変化のあるあそびとは違った味わいがあります。仲間意識が育ってきて、友だちと動きをともにしたいときは、ブランコは入園当初のにぎわいとはかわって、しーんと静かに風にゆれていたりします。

けれど大勢のあそびを味わい得た子どもたちは、また安らぎを求めるかのようにブランコにもどってくるのです。今度はすいているブランコにゆったりと乗って、周囲の「かわってェ」という声を気にしなくても、思う存分あそべる時期が訪れるのです。

一学期の終り近いある日、その日は年長組だけが午後まで保育のある日でした。午前中にぎわっていた園庭も、年少、年中の組が家に帰り、年長組は二組がおべんとうで保育室に入っていると、先程とはうってかわった静かな昼さがりといった情景になっています。

おべんとうの早くすんだ五歳児が一人、二人庭に出てくると誰も乗っていないブランコのところへやって来ました。私は保育室で午前中の後片付けなどをしていると、急に明るい歌声がブランコの方から

聞こえてきました。あ、と思って聞いているとそれは最近若者に人気抜群のチェッカーズの「涙のリクエスト」でした。二連のブランコを合わせてこぎながら、二人で実に楽しそうにうたっているのです。歌詞はよく聞いてみると、私もそうなのですが、この子たちも曲のはじめの部分、「なみだのリクエスト、さいごのリクエスト」というあたりしかはっきり知らないようで、後半のテンポが変ってからはララか何かでメロディだけうたっていました。ブランコのゆれに合わせて、自分たちの好きなうたを心ゆくまでうたっている。こんな楽しい光景を見ていると、こちらの気持まで明るくなってきます。それは保育室で歌の指導をするときにはあまり出合うことが出来ない程、くったくのない明るい歌声と表情でした。そしてリズムに合わせて、ブランコをこいでいます。それは教えて覚えたのではなく、子どもが自分で発見し、自分でその体感を楽しんでいるのでした。私は子どもは体を通して音楽を楽しむのだということを改めて感じさせられ、ブランコには音楽に通じる味があるのだということを考えさせられた一時でした。

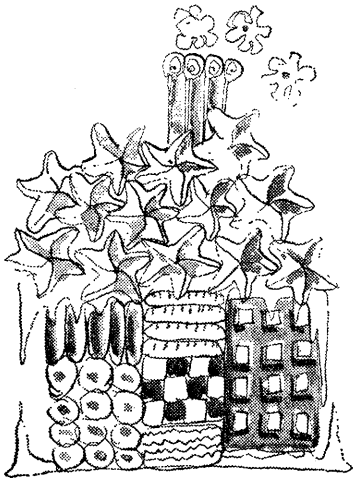
それから別の五歳児のクラスであったことです。それは梅雨明けの待たれる七月の初旬のことでした。

保育室にいた私を、二、三人の子どもたちが息せき切って呼びに来ました。「ネ、ネ、すぐ来てちょうだい。くもよ、くもなの」と口々に言います。何かとても素晴らしいことを見つけた表情の子どもたち、私は何を発見したのかしら、大きなくもでもいてびっくりしているのかしらと思いつつ、みんなの呼ぶ方へ行きました。そこはブランコのところで、そこにも数人の子どもたちが待っています。「なあに？　どうしたの？」と問いかける私に、「いいから坐って、坐って」とブランコに坐らせ、「ほら、

見て！　まっすぐ見てね！」と言われて、ブランコに腰かけて見た真正面には、大きな大きな真夏の入道雲がむくむくとあったのです。「わあ、すごい！」「ネ！　すごいでしょう！　私たちで見つけたのよ」「もう夏になるのでしょう。あれは夏の雲よね」と話しかけます。そして「ブランコをこぐと雲がぐうんと近くなったり、遠くに行ったりして面白いのよ」と教えてくれた子どももいました。早速やって見ました。それは、昨日まで続いていた梅雨空を拭いさったかのような真青な空にもくもくと浮かび上った白い入道雲が、ブランコをこぎながら眺めると、わあと近づいたり、遠くへ行ったりします。「素敵！　すごいのね！」「すごいでしょう」教えてくれた子どもたちも、またブランコをこぎはじめました。あんまり楽しくて、私と子どもたちは暫く入道雲に見入りながら、ブランコをこぎ続けたものでした。

真夏が近づき、空に大きな入道雲が浮かぶのを見ると、私はいつもブランコに乗ってそれを見つけたあの子どもたちの新鮮な驚きと、喜びに輝やく表情を思い出し、そしてその喜びを私にも分けてくれようとしたあの日のことを楽しく思い出すのです。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）



近代短歌に現われた子ども（二十一）

大塚　雅彦

（42）　出征将兵等の歌

満州事変、日中戦争及び太平洋戦争はそれらを総称して十五年戦争と呼ばれる。満州事変が起ったのが昭和六年（一九三一）九月であり、太平洋戦争が終ったのが同二十年（一九四五）であり、その間十五年にわたるからである。そして、満州事変と日中戦争における陸軍の死者は三十数万名であったが、十五年戦争で失われた人命全体は約三一〇万名で、その内訳は、戦死または戦病死した軍人・軍属・準軍属等が二三〇万名、外地で死亡した民間人が約三〇万名、内地の戦災死亡者約五〇万名という（小学館版・昭和の歴史(7)木坂順一郎『太平洋戦争』昭57・12）。別の本によれば、敗戦の時、日本陸海軍の総兵力は七二〇万に

達し、それ迄の戦死者、除隊者を考慮すると、のべ一千万人が兵士として戦争に参加したが、これは日本人の男子総数の四分の一、ほぼ二世帯に一人強の出征兵士を出していたことになり……有史以来最大の動員数であった。そして直接戦場で失われた兵士の生命は約二〇〇万にのぼり、しかもこのほかに、空襲や原爆の犠牲となり、または沖縄・満州等で戦火の巻きぞえとなった非戦闘員を加えて、合計三〇〇万の人命が失われた。ほぼ五世帯に一人の割合で国民は肉親を失つたという（遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史〔新版〕』昭34・8）。いずれにしても莫大なその数に驚かざるを得ない。

出征した将兵たちは数多の手記・日記・記録・書簡・遺稿等を世にのこした。それらの多くのものが戦後刊行され、感動を呼び、今更の如く戦争の惨禍を国民に知らしめるに至ったが、彼等の中には短歌をのこした者も少なくない。彼等は短歌を平常からやや専門的に長くやっていた者も居たろうが、日本人は昔から感懐を歌に托すという習慣もあったから、日頃はあまり短歌に従事しなかった者でも、例えば戦場という極限状況の中での思いを、短歌というかたちで示した例もまた多い。そこで彼等の短歌作品を収録している文献の中から、当面のテーマである子どもが出征将兵にどううたわれているかを考察し、彼等にとって子どもとは何であったかを考えてみよう。

㋑『渡辺直己歌集』

十五年戦争に従軍した将兵の歌集の中で最もすぐれたものの一つは『渡辺直己（なおき）歌集』であろう。彼は明治四十一年、広島県呉市に生まれ、広島高師卒業後、呉市立高女教諭となった。昭和十二年支那事変勃発と共に応召、中国に転戦し、十四年八月河北省で戦死、陸軍大尉に即日昇進。三十一才であった。墓は呉市にある。

短歌は始め呉アララギ会に参加して作り、のち「アララギ」に入会し、土屋文明に師事した。彼の短歌が事実把握にすぐれ、リアリズムの手法によって対象を的確に描写し、戦闘の非情さや戦闘者の緊迫した心情等を鋭く

表出し得たのは、「アララギ」の写実主義で学んだ面が多かった故といえるだろう。「壕の中に坐せしめて撃ちし朱占匪は哀願もせず眼をあきしまま」「涙拭ひて逆襲し来る敵兵は髪長き広西学生軍なりき」――こういう作品のもつ迫真力は、われわれの心胆を寒からしめるし、多くの将兵によって十五年戦争中に作られた作品全体を通じても、あまり類がない。彼の師の土屋文明は、渡辺の作品によって事変短歌が先鞭をつけられ、彼の歌がこの面で指導的役割を担った点を指摘している。

彼の伝記としては米田利昭『戦争と歌人――渡辺直己の生涯と芸術』(昭43)がある。『渡辺直己歌集』は戦死翌年の昭和十五年に呉アララギ会から発行されたが、昭和五十八年に石川書房から複刻版が刊行されている。

①既にして堅き決意はありと言へど生徒等の手紙に涙ぐみたり

②教え児の制服が視野の一角に現れしは昨夜の幻覚なりき

③照準つけしままの姿勢にて息絶えし少年もありき敵陣の中に

直己は出征前に一度結婚したが、間もなく離婚している。従って子はない。彼の歌集に出てくる子どもは女学校で担任した教え児の女生徒たちと、③のように敵の少年兵をうたった珍らしい作品とである。彼が呉市立高女教諭として勤めたのは昭和六年末から、応召する十二年夏頃までである。彼は明朗で人あたりもよく、人情があり、洗練された風貌であり、また、文学への情熱をそのまま生徒らにぶつけるような授業であったから、生徒たちにすこぶる慕われたという(米田、前掲書)。戦地にあっても屢々教え子からの慰問の手紙が来たらしく、①は「征途につく」一連にあるから比較的応召初期の作品であるが、その後戦場にあっても、エリカの花を送って来た児、慰問袋の中に双葉山夫妻の写真を送って来た児等が、時にうたわれている。②は戦陣に於いてなお、明日をも知れぬ日々忽忙の間にあって、視野の中に教え子の制服の幻覚を見るあたり、教師軍人ならではの作であろ

う。③は渡辺作品の中で最も有名なものの一つであり、ヒューマンな感情を深く湛えた一首である。涙流しつつ逆襲してくる中国の学生兵に、日本軍の侵略に怒って生命をまとに抵抗してくる彼等への愕きや怖れを感じつつも、一面では彼等を憐まれずに居られない民族同士の対立を超えた人間的な胸熱き想いが③にも活き活きと息づいている。そして十代の子どもを兵として駆り立てる戦争の非情さが、この銃に照準したまま絶命している少年兵の姿に端的に現われている。私はこの③の歌に、第一次世界大戦を描いた映画の名作「西部戦線異状なし」の最後の場面――少年兵が塹壕の中で、眼の前にとまった美しい蝶をつまむべく身を乗り出した瞬間、狙撃されて絶命するあの胸つぶれる如きひと齣を想起せざるを得ないのである。

㋺ 『戦没学生の遺書にみる15年戦争』

人口に膾炙している『きけわだつみのこえ』昭24東大協同組合出版部刊、その後、昭34に光文社より新書版刊行、更に昭57に岩波文庫版刊行）には、多くの遺稿にまじって十三名の戦没学生が短歌を遺している。総計四十四首であるから多くはない。この中で、上官の罪を負うてシンガポールで刑死した京大生木村久夫上等兵の十一首はさすがに哀切を極めるが、他の学生たちの短歌は紋切型で稚拙であり、彼等の文章がすぐれているのに比して、不思議ですらある（日本戦没学生記念会機関誌「きけわだつみのこえ」第3号〈昭35・6〉所収、拙稿「『わだつみのこえ』の歌」参照）。また、子どもを対象とした歌も妹をうたったものが一首あるくらいで、殆どない。それに較べると『戦没学生の遺書にみる15年戦争』（日本戦没学生記念会編、昭38光文社刊、その後『第2集きけわだつみのこえ』と改題）は僅か五名の者が短歌をのこしているだけだが、その中、既述の渡辺直己の他に、井上淳が抜群のすぐれた短歌をとどめている。井上は昭和十六年十二月に立教大学文学部哲学科を卒業、十七年一月に入隊し、十九年七月にマリアナ方面で戦死した。陸軍兵長であった。「思想ばかり高遠になりても食えなくば仕方

あるまじと父はまた言う」というような、昭和初期の世相を背景にしたと思われるユニークな作もあるが、次のような子どもを素材にした口語調の異色作がある。

①べったりと廊下にすわりついて四五人もの欠食児童が絵本をみている

②欠食の子らも湯のみに湯をもらいしゃべりつつただ湯をのみており

③火鉢のそばなかなかはなれぬ欠食児に級長はやかましく座につけという

これらは「児童の弁当栄養調査」という題がついている作品群である。編者の傍註によると「井上氏は予科より本科へ進むあいだ、一時、小学校の代用教員をしていた」とある。つまりこれは、その代用教員（なつかしい言葉だが、正規の資格――師範学校卒――のない、臨時採用の教師で、旧制中等学校卒業生などが多く採用されたようだ。石川啄木は盛岡中学校中退だが、母校渋民小学校の代用教員に採用されて、極めて意欲的な教師活動をしている――洋々社刊「啄木研究」第7号〈昭57・1〉所収、拙稿「教師啄木」参照）時代の体験を詠出したものだろう。受持の児童の中に弁当を持って来られない欠食児童たちが何人も居るのを、痛ましい思いで見ていたのであろう。私は昭和初期に農村の小学校で学んだが、今考えると弁当を持って来ない仲間の児童も居たように思う。それほど農村は貧しかった。「欠食児童」ということばをマスコミも当時よく使った。日本経済史にいう「昭和恐慌」は農業恐慌に最も尖鋭なかたちで現われ、米価は下落して農家経済は深刻な圧迫を蒙り、負債の増大、家計赤字の進行に苦しみ、小作農等の貧農層は特に窮乏が甚しかった（隅谷三喜男編『昭和恐慌』昭49）。また東北地方の凶作による窮迫は昭和四年頃から慢性的に続いていたが、昭和七年七月廿七日、文部省は農漁村の「欠食児童」は廿万人と発表している。昭和九年は特にひどく、冷害と大凶作のため、「欠食児童」や「娘の身売り」や自殺や行き倒れ等が続出したのである（小学館版「昭和の歴史」別巻、原田勝正編『昭和の世相』昭58）。井上の短歌はこのような世情を背景にして読むと、

まさに世相史的歴史的意義があるといえる。空腹に堪えられず廊下に坐りこんで絵本を見たり、飯がないのでせめて湯で空腹を幾らかでも凌ごうとする児童らが①②で捉えられ、ひもじさと寒さに火鉢の傍を離れられぬ彼等と、役目柄、仕方なく「席につけ」と彼等に命じている級長（今のクラス委員に当ろうか）とが③で描かれる。そして、それらを見つめている若い代用教員の作者――暖衣飽食の当世では想像もつかぬ世界であるが、こういうすぐれた作品を示した若者をも、戦争は永久に奪ったのである。

㈧ 『支那事変歌集』

『支那事変歌集』と銘うった本には何種かのものがある。例えば大日本歌人協会編『支那事変歌集』は『戦地篇』と『銃後篇』の二冊があり、『戦地篇』は昭13・12改造社刊で戦地詠二七〇四首（五〇〇名）を収め、『銃後篇』は昭16・10大日本歌人協会刊で歌壇の雑誌百種に近いものの中から約一五〇〇首（一〇〇〇余名）を抄出している。また読売新聞社編『支那事変歌集』（昭13三省堂刊）や、アララギ年刊歌集別篇としての『支那事変歌集』（昭15）もある。ここでは読売新聞社版のもの（同社が懸賞募集した作品の中から佐佐木信綱・斎藤茂吉の両歌人が選をしたもので、一冊の中が「現地篇」と「銃後篇」に分れている）を一見してみよう。「現地篇」では子の写真にそへし手紙の片仮名をまた出して読む晝の暫壕に（北支派遣軍　木暮武夫）

其の他二、三くらいで子どもの歌は少なく、

銭投げの遊戯してゐる支那街の子等の群にも吾は馴れにき（天津　鮎沢周太）

小孩（ショーハイ）の片言なれどやまと言葉いふをし聞けば嬉しくもあるか（上海派遣軍　金子賢三）

と、中国の子ども達をうたったのがやや珍らしいくらいであるが、「銃後篇」には戦争色が深まってゆく時代の子どもらのさまざまの相（すがた）を描出しているのが注目される。

①父にあはせて出征の歌口真似す吾子（あこ）は手をふり足踏みならし　小柴千代子

②征く父に甘えだかるる幼子が片言ながら軍歌うたへる　三上　一郎

③この家も出征なりと児童等の言ひかはしつつ行くも身に沁む　城知　恵子

④戦線に兵馬苦闘の話をば身ゆるぎもせで児童等聴き入る　小川伊七造

⑤子供等が道に殘がきし飛行機は単葉にして爆弾積みたり　平沢　秀政

⑥穂波わけて突撃したる子らあまた夕日を浴びて叱られ居るも　郡司波津子

⑦五月雨の溜りし水に子等寄りて敵前渡河の真似ごとをする　中村さか恵

⑧中隊の晝餉する前に童等が寄り来て罐の殻持ちてゆく　藤野　波男

⑨金属類一品献納に壊れたる玩具自動車を持ちて来ぬ吾子は　加藤　信夫

⑩すこしづつためし小遣献金すと吾子わが前に持ちて来にけり　飯島　操

⑪出征の家の手助けに生徒らは昆布干場の砂利均し居り　高橋　十成

⑫献金せんとはげましあひて村の子等牧草の種日ざかりにつむ　越田　健

⑬負へる子をなだめつつ出す求職票に夫応召の為と書かれたり　荻田きみ子

⑭鬚をはやし馬に乗りたる夫の写真部隊長の如しと子らは喜ぶ　飯田　しん

⑮送りたる子等の写真を身につけつつ徐州に向ふとのたより届きし　益田　初子

⑯子がかきし空中戦のクレヨン畫慰問袋に入れて送りぬ　高島　喜作

⑰吾子起ちてけふは一歩を歩みぬとまづ戦線の夫に便りす　西田　喜美

⑱鮮童の手に手に振れる日のみ旗ますらをの心つよくうつらし　樽井寿々代

⑲陽焼せし顔すこやかに帰り来し夫のそばより離れず吾子は　椿　千代子

⑳行賞の発表ありし新聞を子等とささげぬ亡き父の前に　　渡辺　仁子

㉑あはれ迪子軍歌うたへば天にしてみ霊も聴くか其のうたふ声を　　石黒　清子

①②は出征する父と子で、幼子であるが、父の出征に軍歌を唱う孩児は、やや長ずると③④のような「軍国の子」になって行った。⑤⑥⑦は当時の子ども達の遊びを示しているが、遊びもまた戦時色であった。⑥にはフモールがあるが、こうした遊びは戦時に限らないし、まことにラスキンが言ったように、幼時から男児は男児らしい遊びをし、女児は女児らしい遊びをおのずからするものかもしれない。⑧から⑫までは子どもの奉仕活動だ。こんなサービスや国策への協力を「お国のため」と、戦時中の子ども達すらさせられていた。但し⑧は子ども達が自然に（自発的に？）やった行動かもしれないが、それすら時代を思わせる。⑬から⑰までは、銃後の妻と子のすがたが現われている。⑬がのこされている妻子の生活のきびしさを反映していて、個性ある歌である。⑱は作者の住所が「安東」とあるから、当時満州に居た邦人の作だ。出征、通過する日本兵を朝鮮の童たちが日章旗を振って迎え、送ったのを描いた歌であろうか？　日本の軍国主義の中に朝鮮の児童たちも巻き込まれていた事実を、日本人は忘れてはならないであろう。⑲は帰還兵と子どもの歌、⑳㉑は恐らく戦争未亡人の作品であろう。戦没した亡夫の霊前に論功行賞の発表を載せた新聞を供える妻と子。軍国主義者たちは「靖国の妻」などと軍国美談めいた操作をしてこうした遺族をクローズアップし、国民の戦意昂揚をはかった。しかし妻の本当のねがいは、明治のむかし与謝野晶子がうたったように「君死にたまうことなかれ」であった筈である。頑是ない幼児の迪子さんが軍歌を唱っても、戦没した在夫の亡父の幽魂は、それを喜んだかどうか。むしろ霊に心あらば断腸の思いで聴いたであろう。戦争が子ども達にとってもどんなに酷烈無慚なものであるかを今も伝える作品群である。

（お茶の水女子大学）

保育実習ノートから①

保育実習を体験した学生たちの、ノートをそっと見る機会を得ました。実習生と、実習生を受け容れた幼稚園の先生との交流も偲ばれる美しい交換ノートの数葉をご紹介しましょう。

（註　Tさんは大学四年生、四月からこの園に就職する）

◈TさんからK先生へ

二月十三日（月）　雪のちくもり　年長みどり組

＊朝、雪かきをしたり、先生のお手伝いをしながら子どもを待つ。自分たちのクラスに突然の〝新顔〟が入って子ども達もおどろいた様子。それでも「おはようございます」と声をかけると、小さな声で答えてくれる。いつものことながら緊張してギクシャクしてしまう。

＊高鬼、すわり鬼、色鬼など、遊びの変化にとまどいながらも、子ども達の笑顔と元気な声に引っ張られて遊んでいる自分に気づく。いつ、何時でも子ども達の生き生きとした姿は何よりも魅力的である。男の子達は積木でいろいろの仕掛けをつくっていた。一人がつくり出すと他の子もそれを真似て思い思いにつくり始める。友達の活動に誘発される様な形で自然に遊びに入っていくことは、先生に言われてやるのとはまた違った楽しさがあるのではないか、と思った。自分で考えてつくった仕掛けを「見て、見て」と自慢そうに教えてくれた、そんな時の子どもの充実した気持ちを共感できる様にならなければいけないな、と思った。

＊一日目ということで全体の流れが気になってしまい、あまり細かいところまで目が届かなかった。また、あまり自分が遊びに夢中になると回りの子ども達の様子が見えなくなる為、遊びに没頭する度合いがむずかしいと思った。自由に遊ぶ時間が多いせいだろうか、「これぞ子ども！」という程、元気な姿を見せてくれて感激してしまった。自分の気持をとても素直に表わしているようだった。子ども達においていかれない様に、そして子どもから教えられること一つ一つを大切にしながら過ごしていかなくては、と思う。

◈K先生からTさんへ

きれいな文字を見るのは気持のよいものですね、こども達はすぐ、なにによらず先生に影響されやすく、まさに「学ぶ」とは「まねる」ことにほかならないと、幼いだけにこわくなります、私が「た」という字をたて長に「た」と書いていました。当時はゴム印は使わず、お知らせでも、絵本でも、ペンで名前を書きました、クラスの子どものおばあ様に、「先生ですね、横を短く書くのは」と言われました。先生の動きも、言葉づかいもすぐにまねるので鏡のようです。

◈TさんからK先生へ

二月十五日（水）　くもり　みどり組

＊けんちゃんが泣き叫びながら積木をくずし始めた。回りの子に理由を聞くと、「入れて」も言わずに入ってきたことから喧嘩になったらしい。けんちゃんの興奮した様子におどろいてしまい、怪我のない様にするだけで精一杯だった。こんな時は、子どもを責める前にどうしてその様な状況になったのか、また子どもはどんな気持なのだろうか、ということをよく考えてあげなければならないと思った。泣いていたかと思うと仲良く大きな戦艦づくりの仲間に入っている。

＊お帰りのとき「友達はいいもんだ」をうたった。誰に言われたわけでもないのに、一番前の列の男の子達が肩を組んでうたいだし、他の子ども達も何人もそうした、きっとこのうたのメロディーや歌詞を子どもなりに受けとめた結果、自然に肩を組むということになったのだと思う。私達大人が忘れてしまった「感じる心」が子ども達にはあるのだな、と思うと、うらやましくさえなった。そしてそんな純粋な感性を大事に育てていかなければなあ、と思った。

ブリューゲルの「子供の遊戯」(14)

――西洋美術史にみられる〝子供の遊戯〟小史――

森　洋子

ルネサンス（3）――運動の重視

人生の諸段階の「幼年期」（第十三回、図42～48）などにみられる子供たちは、広場で輪回し、輪舞などのびのびと体を動かす遊戯に熱中していた。ブリューゲルの「子供の遊戯」でも、逆立ち、馬跳び、砂山への駈登りなど元気いっぱいに肉体を鍛える遊戯が描かれていた。筆者の大学の同僚が語ってくれたところによると、ヨーロッパの学者たちは体育の側面からも、ブリューゲルの絵や同時代の遊戯版画に注目しているという。こうした体育訓練はすでに中世後期において、騎士道の一要素としてかなり関心がもたれていた。先回でも触れた十五世紀中期の『ブルゴーニュ公妃の時禱書』の月暦ページに、青年たちの宮廷遊戯が描かれていたが、七月の「氷上での槍合戦」、十一月の「コルヴェン遊び」（ゴルフの前身）などは明らかに運動競技である。ルネサンスになると、人文主義者は「反スコラ的反応の中で、遊びが教育的な可能性を有していることに着眼し」[注1]、とくに体を

動かす遊びのもつ精神への影響を重要視するようになった。マントヴァのゴンザーガ家の家庭教師であったヴィットリーノ・ダ・フェルトレも、すべての子供の遊戯は身体の訓練や社会的相互作用のために役立つと主張した。[注2] 彼はまた軍隊での訓練や単なるリクレーションとは別に、体操それ自体が忍耐を養うのに役立つ技であることを教えた最初の教育者かもしれなかった。彼は身体の規則的な練習は健康の基礎であるから、子供たちには強制的にもスポーツをさせなければならない、と述べた。ヴィットリーノの研究家ウッドウォドは十五世紀のこうした状況をつぎのように説明している。「スポーツの価値は、健康な道徳的刺激を与えることであり、放縦、卑劣、また他人の利益や幸福に対する利己的な無関心さから守ることである。つまりスポーツの価値は今日よりも十五世紀において実際の学校教師たちがはるかに重んじていた議論であった。[注3]」

ボヘミアとハンガリーの王ラディスラスは異教徒トルコに対してキリスト教徒として防衛力をつけるためにこう奨励した。若者たちは早くから、弓、投石器、槍の使い方を学び、騎馬、乗馬、跳躍、水泳を学ばねばならない。幼い子供に鼓舞すべきゲーム遊び――ボールや輪回し――は乱暴で粗野であってはならないが、それに熟練の面ももたなければならない。[注4] つまりラディスラスは少年たちは身体を鍛えるために運動の激しい遊びは必要だが、と同時に技も習熟すべきと考えたのである。同じくイタリアのサドレート枢機卿(一四七七～一五四七)は、古代ローマの伝統的な体の訓練、例えば、ボール遊び、ランニング、投げ槍、騎馬などが、若者たちを戸外で運動させ、洗練した技、高度に専門化した訓練よりも、秀れたエネルギー、自発性を養うものと指摘していた。[注5]

興味深いのは、十六世紀のスペインの人文主義者ビベスで、彼は子供のゲームを合法的と非合法的に分けた。すなわち、ボール、跳躍、競走、体操などは前者に属するが、サイコロ、トランプ、その他チャンスで勝負するゲームや水泳などは非合法とみなした。つまり賭事を伴う遊戯を禁じたのである。[注6] しかし、なぜ水泳が非合法的

なのか理解できないが、おそらく今日のように小学校で水泳を体育の一部として教えたり、また十分な浮袋もなかったので（当時、泳げない子供は豚の膀胱をふくらませ、それを背負って泳いだ）、水死する子供が多く、危険視されていたのだろうか。

イエズス会士たちも、ルネサンスの運動重視という新しい意識に貢献した。カトリック教国でのイエズス会士たちの教育活動はめざましいものであるが、彼らの著わしたラテン語の体操概論書は、当時ばかりでなく、十八世紀の医師たちからも、身体健康法のための基本的文献として利用されたのである。例えば、ティソーの『医学的、外科学の体操』もそのひとつであった。[注7] 同書で、体操競技は体のあらゆる部分が同時に訓練される、と推奨していた。

ルネサンス（4）——子供をみるブリューゲルの眼

本連載ではブリューゲルのウィーン美術史美術館の「子供の遊戯」を中心に論じたので、同画家による他の油彩画や版画における遊戯に注目する場合でも、ウィーンと同種類のものに目を転じた。しかし、ブリューゲルはこの作品では季節として強い日差しの初夏を選んだので、九十種類以上の遊戯を描きながら、冬の遊戯は除外せざるを得なかった。だがいくつかの作品にみられる冬の典型的な遊戯、例えば、スケート滑り、橇滑り、コルヴェン遊び（一種のアイスホッケー）、氷上での独楽回しなどをここで着目してみたい。まず冬の遊びが描かれた作品を列挙してみよう。

「シント・ヨーリス門前の氷滑り」（素描一五五八年、図1、2）

「雪中の狩人」（一五六四年、図3）

「鳥罠のある冬景色」（一五六五年、図4）

「ベツレヘムの戸籍調査」（一五六六年、図5）

「雪中の東方三博士の礼拝」（一五六七年、図6）

こうしてみると、ブリューゲルは一五五八年というかなり早い時期に、版画のための下絵素描「シント・ヨーリス門前の氷滑り」で種々な冬の遊戯を描写している。

図1　ブリューゲル「シント・ヨーリス門前のスケート滑り」銅版画（下絵素描 1553年）

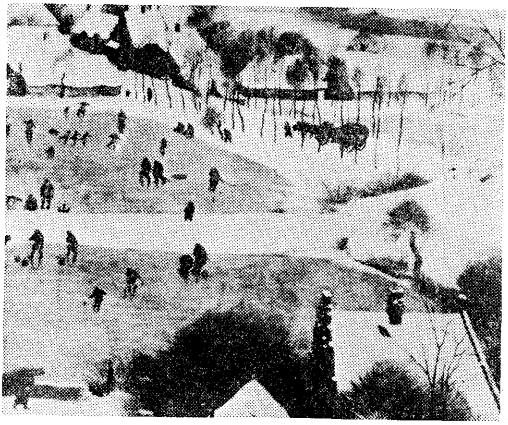


図3　ブリューゲル「氷滑りを楽しむ子供」（「雪中の狩人」の部分）油彩　1565年

図2　コルヴェン遊び（図1の部分）

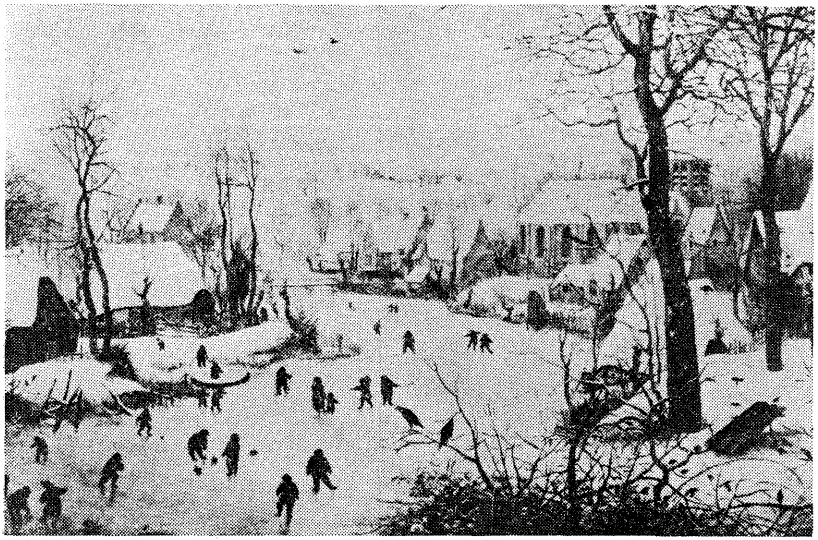


図4　ブリューゲル「鳥罠のある冬景色」油彩　1565年

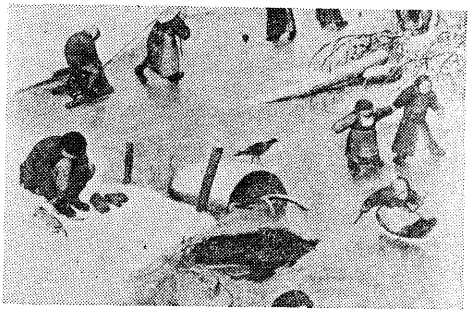


図5　ブリューゲル「スケート靴をはく少年と橇滑り」（「ベツレヘムの戸籍調査」の部分）油彩画　1566年

図6　ブリューゲル「橇滑りを楽しむ幼い子供」（「雪中の東方三博士の礼拝」の部分）油彩画　1567年

この作品には先述の冬の典型的な遊びがすべて描写されている。ただしここではスケート滑りもコルヴェンも大人の遊びとして描かれていた。とくにスケート靴はかなり詳細に描写されていて、興味深い。おそらく金属のエッジつき木製の台に左右穴をあけて靴を紐で縛ったのであろう。中世のスケート靴は靴の下に動物の骨を縛って滑っていた。例えば、十二世紀のフィッツステファンの『著名なロンドン市民のスケッチ』の中で、ロンドンの北側の沼地が氷ると、その上で若者たちが遊ぶ。ある者はスピードを出し橇滑りをする。「他の者はかかとの下に骨を縛り、小さな先の尖った杖で自分自身を動かし、空を飛ぶ鳥のように、弓から放たれた矢のように速く滑る」[注8]と述べている。それが十三世紀にはオランダですでに鉄のエッジつき木製の台が考案され、ブリューゲルの時代に至るのである。因みにエッジが装備されたスケート靴が流行するのは今世紀になってからである。

ところでブリューゲルの画面の前景で、幼い子供が橇滑りを楽しんでいるが、ウェインの研究によると、これは大きな獣類、例えば牛か馬の下顎骨を利用したものという[注9]。最初の橇が動物の骨というのも民俗学的にも注目すべき事実である。なお「ベツレヘム戸籍調査」では、三本脚の椅子で説教用椅子 preekstoel とよばれるものを橇代わりに使う子供たちの姿もみられる。なぜなら下顎骨は幼い子供しか中に体が入らないからであろう。その側で二人の男の子が鞭独楽遊びをしているが、氷の上では滑りもよく、十分楽しめるのであろう。

「シント・ヨーリス門前の氷滑り」は後の油彩画と比べて、ひじょうに寓意的性格が濃い。それは版画化されたとき、発行者ヒエロニムス・コックによって付された銘文によって明白となる。

「アントウェルペン市の前で
人びとは氷滑りをする。
こっちの方へ、またあっちの方へと滑り、
見物人はあらゆる方向から
ポカンとそれを眺めている。
よろめいたり、転んだり、

上手に、誇らしげに滑るもの
われわれがどんな風にこの世を
滑っていくかを
この絵から学びなさい。
ある時は愚かに、あるときは賢く、
己れの道を滑っていく。
氷よりもはるかにもろい
この虚ない世の中を。」

しかし「雪中の狩人」以降の数点の油絵画の冬景色には、こうした人生の虚しさへの寓意はあまり感じられない。むしろ彼は絵画史上、初めて冬の情趣をモニュメンタルに制作する意欲に燃え、つぎつぎと宗教的な主題でも、その舞台に雪の深いフランドルの農村を選んだ。その作品群はかなり評判となったとみえ、「鳥罠のある冬景色」などは後に、息子ピーテル二世の工房によって五十数点のコピーが制作された。しかも十七世紀の人びとはこの静かな冬景色にも、ひとつの道徳教訓を求めたのか、ピーテル二世は前景に大きな氷の穴を描き、人びと

図7　ブリューゲル「輪舞」（「シント・ヨーリスの縁日」の部分）銅版画（下絵素描1559年）

図8　ブリューゲル「頭と尻遊び」（「シント・ヨーリスの縁日」の部分）銅版画

に「人生の落し穴」を暗喩した（ブリューゲルの原画の穴は絵の端ぎりぎりに描かれている）。

ほかに縁日の祭りを描いた銅版画「シント・ヨーリスの縁日」では輪舞（図7）が、また同版画には、体操ごっこ（図8）もみられ、ひじょうに興味深い。後者は「頭と尻」kop en gat と題される遊びで、一人の男の子が逆立ちになった相手の股の中に首を入れ、互いに相手の身体をしっかり摑んだまま、横にしゃがんでいる男の子の背中の上に〝車輪〟のように転がる遊びである。すると二人の子供の上下関係は逆になるので、もう一度反対側から転がる。次にはしゃがんでいた二人が同じように〝車輪〟となる。ゆえにこの遊びを「生身の車輪」Living Wheels と名づけた研究者もいた。[注10] この遊戯はブリューゲルの油彩画や他の銅版画には描かれず、この「シント・ヨーリスの縁日」においてのみだが、祭りに関連する特殊な遊戯とは思えない。この銅版画より少し後に、マルテン・ヴァン・クレーヴェがおそらくウィーンのブリューゲルの「子供の遊戯」に啓発された遊びの絵を制作している（図9、図10）。約三・四十種類ほどの遊戯の中で、とくに前景にこの「頭と尻」の遊びがみられる。ゆえに当時男の子たちの愛好した体操ごっこと考えてよいだろう。またタイル画の研究家ヤン・プライスの研究によると、十七世紀オランダの銅版画（図11、それに基づく十八世紀の四枚組合わせのタイル画もある）、また同時代の二枚の組タイルにもこの遊びは稀れではあるが登場している[注11]（図12）。

この遊びではブリューゲルの版画より約一世紀後に発行されたジャック・ステラの『子供の遊戯と楽しみ』にも歌われた。銅版画の挿画（図13）はブリューゲルの子供たちと全く同じ遊びで、おそらくフランスでもポピュラーな体操ごっこだったのであろう。ただしここでは四人ずつ三組の「尻と頭」が出来ているので、半円形に次々と転がることができ、よりダイナミックである。そこには「屁と口の遊び」Le jeu de pet et gueule と題し、次のような四行詩が添えられている。

図9　マルテン・ヴァン・クレーヴェ「子供の遊戯」油彩　1570年

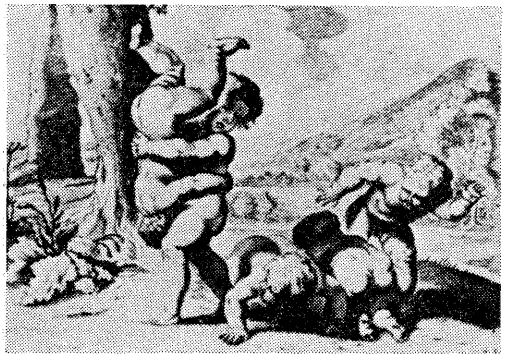


図11　C・ホルスティン「頭と尻遊び」銅版画
17世紀中期

図10　マルテン・ヴァン・クレーヴェ「頭と尻遊び」(図8の部分)

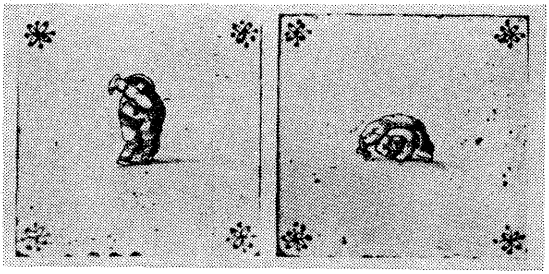


図12 「頭と尻遊び」オランダのタイル画　17世紀中期

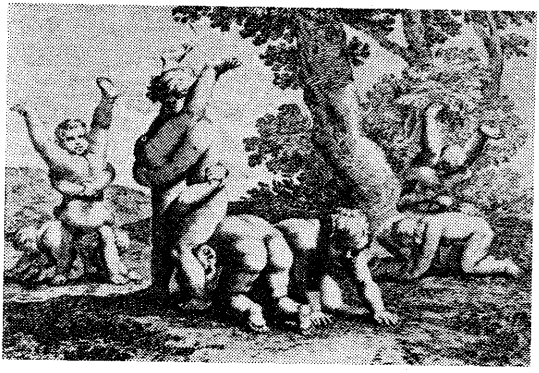


図13 クローディン・ブゾネ「頭と尻の遊び」ジャック・ステラ『子供の遊びと楽しみ』銅版画　1657年より

口と尻の遊び

「この楽しみはとても無邪気だ

この気楽しの遊びの中で、

子供たちは思う存分戯れる

だが彼らは互いの股を締めつけるので

うっかりして、あるいは

故意に出した屁を

鼻は恐れねばならない。」[注12]

他方、民俗学者ゲーニュベーはかつてフランスのディジョンで行なわれた「阿呆祭り」で、二人の道化がこの遊びを演じたことを指摘した。彼はこの遊びが「倒置、増殖、高低の弁証法の魔術的シンボリズムの表題」と解釈している。[注13]

なおウィーンの「子供の遊戯」を除いて、ブリューゲルの作品の中でもっとも子供の遊びが多く画かれているのは、「謝肉祭と四旬節の喧嘩」（ウィーン、美術史美術館、図14）である。この作品はウィーンの「子供の遊戯」の一年前、一五五九年に制作されているので、いくつかの遊びはすでに先例となっている。

図14　ブリューゲル「謝肉祭と四旬節の喧嘩」油彩　1559年

キリスト教の国々では、キリストが復活した日以前の四十日間、肉食を断ち、禁欲の生活に入るが、これを四旬節とよぶ。そのため四旬節に入る三日間（あるいは一週間）、民衆は仮装行列、路上寸劇などの見世物に興じ、賭事をしたり、大酒を飲み、馬鹿騒ぎをする。こうした大人たちの遊びに混じり、子供たちも思い思いの遊びに没頭して解放感を味わう。謝肉祭と関連した子供の遊びとみられるのは、前景左端に立つ男の子で、彼は丸帽の上に後述の「豆祭り」の王の扮装のつもりで紙の冠をかぶり、手に謝肉祭のアーモンドと蜂蜜入り菓子をもつ[注14]（図15）。同じ姿の子供は、季節画シリーズの「暗い日」にもみられる。この男の子が前掛けをすることは当時の習慣としては決して珍しくはなかった。それは十六世紀

図15　ブリューゲル「豆祭り王に扮した子供」（図14の部分）

には衣服の洗濯はそれほどひんぱんに行なわれず（かなりの時間と労力を費すため、親たちは子供たちの衣服の汚れを避けるために）こうした大きな前掛けをさせていたからである。また彼は腰に太いソーセージを二本はさんでいるが、これも謝肉祭の風俗のひとつであった。

同じく前景で仮面をかぶり、大きなワラの帽子に木のスプーンをつけ、二本のローソクを点した帚をかつぐ男の子がいる（図16）。彼は扮装から倭人を装っているが、おそらくオリエント風なマントを着て前を行く仮面の男の息子かもしれない。ローソクつき帚は二月三日に祝祭日をもつ聖ブラシウスに因んでいるのだろうか。今世紀の初め頃まで、ブラバント、リンブルク、カンピン地方では二月三日に今年も肺の病に罹らないようにと、ワラの巻いた棒にその点したローソクをつけて歩き廻ったという。

図16　ブリューゲル「仮装行列に参加する子供」（図14の部分）

つぎに後景の角の家の前で四人の子供が遊んでいるが、これは「王様乾杯」（図17、直訳は「王様がお飲みになる」）という「豆祭り」に因んだ遊びである。それは樽の上で大きなジョッキーからビールを飲む子供を、樽の囲りの三人の子供たちが手をあげてはやしたてていることから分かる。「豆祭り」というのは、もともと一月六日の御公顕節に各家庭で祝われるゲームで、その日のために主婦は一個の空豆入りのケーキを焼く。そして家族全員でそのケーキを分け合い、空豆の入った一片を得

図27　ブリューゲル「王様乾杯」（図14の部分）

た者が、その日の王様となり、家あげて「王様乾杯」と祝杯をあげる。この祭りはちょうどブリューゲルの生きた十六世紀頃から西ヨーロッパでポピュラーとなり、同時代の絵画にもしばしば描かれたが、とくに十七世紀ではヨルダーンスやモレナール、ハブリエル・メツーなどフランドルやオランダの画家たちによって愛好された主題となった。

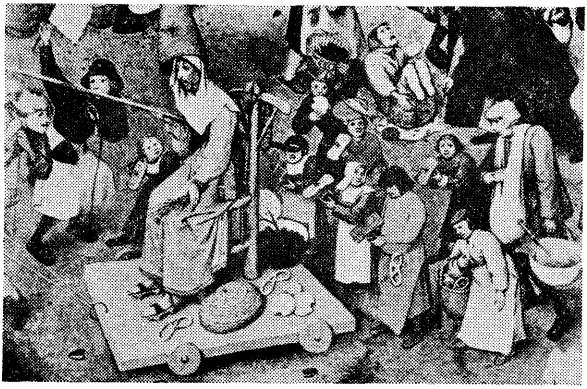


図18　ブリューゲル「四旬節側の楽隊」（図14の部分）

また後景の道路では六人の男女（子供も含め）による輪舞が行なわれているが、前述の「ホボケンの縁日」と同じ踊りがみられることから、謝肉祭の祭りと関係があるのだろう。というのは四旬節の期間、人びとは踊ることを禁じられていたからである。

ところで四旬節側の遊戯はどうであろうか。まず目につくのは、四旬節の擬人像である老婆の車の背後の「カタカタ鳴らし」[注15]のグループである。この鳴物の説明はすでに行なったが（図18、第九回、No.57参照）、今日、筆者が気がついた点は、ブリューゲルが意図的に謝肉祭側の楽隊と対比させている点である。すなわち謝肉祭側では、金（かね）のカップ、魚焼き用の鉄網にキッチン・ナイフといった厨房楽器、ロンメル・ポット（素焼きの壺に豚の皮を貼り、中央に固着させた棒を上にひっぱり、「ボンボン」とリズムをとる楽器）や古い形のヴァイオリンなど、各種の〝音〟はまことに賑々しいかぎりであろう

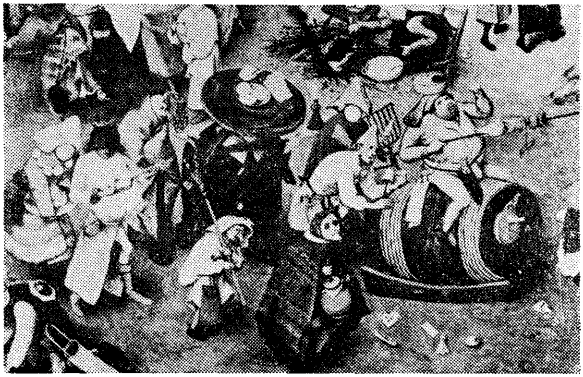


図19　ブリューゲル「謝肉祭側の楽隊」（図14の部分）

（図19）。それに対して四旬節側の子供たちのもつ「カタカタ」は複数合わせればかなり力強い響きを出すが、その音色は一様で、依然として地味である。[注16] このほかにも前景左端の「サイコロ遊び」のようないくつかの遊びは描かれているだろうが、多くは大人のそれと区別するのが難しい。なおこの鳴り物が七つの徳目シリーズの版画の「剛毅」（図20）では、怪物たちのもつ巨大な〝武器〟として登場してくるのは意外である。おそらく板の上のハンマーは猛烈な騒音で敵側を威嚇するだけでなく、それによじ登ろうとする数人を一度に潰すこともできる。さらに板そのものは数人を防禦する強力な〝楯〟ともなった。

その他広場の中央では五人の男の子が独楽回しに励んでいる（第八回、№55参照）。時禱書の月暦ページでも三月の余白に、独楽回しが描かれることで、この遊戯はヨーロッパでは一般に春の遊び、おそらく四旬節頃の遊びと解される。ちょうど一五八一年に出版されたイギリスのリチャード・マルカスターの『ポジションズ』の中に、独楽回しについて、その遊戯の季節をこう述べている。「独楽回しはあらゆる技を示す練習となるのに、それを馬鹿にする大人がいたら、四旬節がやって来て、独楽回しの時節になったとき、少年たちはその人を鞭で打ち、罰する。[注17]」

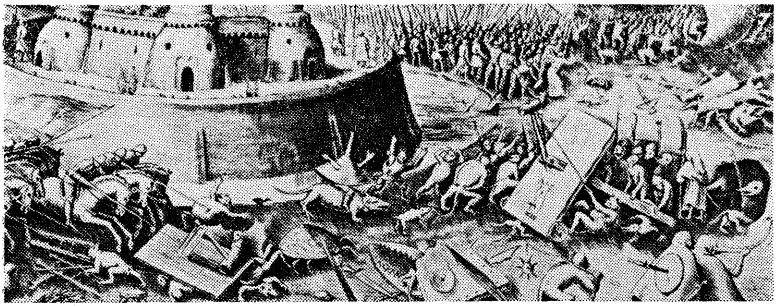


図20　ブリューゲル「カタカタ鳴しの武器」（「剛毅」の部分）銅版画（下絵素描　1560年）

四旬節の遊びとはおそらく関係ないだろうが、近くで二組のカップルが「鍋投げ」（図21）を楽しでいる。すでに受け取り損ねた土製の鍋の破片が地面に散らばっている（七回、No.45参照）。この遊びは「壺投げ」と題されることもあるが、脚つきの同種のものがブリュゲールの版画「肥った所」でも、実際に火にかけられて鍋として使用されているから、壺とするのは間違いであろう。また彼らの左側では二人の年長の男の子が二人でおはじき遊びをしている（図22）。十七世紀のタイル画でもそうだが、おはじきは当時まだ女の子の独占遊びでは

図21　ブリューゲル「鍋投げ」（図14の部分）

図22　ブリューゲル「おはじき遊び」（図14の部分）

なかったのである。

このようにブリューゲルの子供の遊戯の世界には、それ以前の絵画史にない新しい視点が示されていた。すなわちできるだけ多種類の遊戯を列挙しようとする百科事典的な意図である。こうした意図はブリューゲルの同時期の他の作品、例えば「ネーデルラントの諺」（一五六〇年、西ベルリン、美術館）にもみられる。彼はここで同一画面に八十五種類以上の諺の形象化を試み、しかも「子供の遊戯」と同様、個々の諺を独立的に描いた。また今述べた「謝肉祭の四旬節の喧嘩」でも、彼は謝肉祭で行なわれるあらゆる種類の見世物とイヴェント、また四旬節側の禁欲グループ、慈悲行為、ミサへの参列などで画面を埋め尽している。

「バベルの塔」（一五六三年、ウィーン、美術史美術館）では当時大聖堂や城塞などを建設するときに使われた建築技術、建設工事の過程の詳細を描き出そうとした。「季節画」シリーズ（現存五点）でも、従来の月暦画のように一画面にひと月の営みを描くのではあきたらず、例えば「雪中の狩人」（一五六五年、ウィーン、美術史美術館）では十二月、前後の季節にみられるあらゆる種類の真冬の自然現象と人間の営為——狩人の山からの帰還、豚の屠殺と毛焼き、氷滑りで楽しむ子供、煖炉の不始末からの火災——などを念入りに描く。[注18]

あるテーマのもとで考え出される社会風俗、民衆文化と行事、人間の日常の行為、種々の農民のタイプなどを「百科事典的」というか、「全列挙主義的」に描出しようとする姿勢は、まさしくブリューゲル絵画の特徴なのであった。だが「子供の遊戯」の場合、彼がなぜこれほどまで〝観察〟し、〝記録〟しようとしたのだろうか。

種々の記録によると、すでに十五世紀頃からネーデルラント各地で、市庁舎の玄関、教会内や敷地内、道路での遊びに対し、市の禁止令が出されていた。最古のものは一四五六年のドルトレヒト市の市令で、道路に沿って子供が輪回しをすることを禁じていた。また一五五七年にも、ハールレムでつぎのような発令が出ていた。「いかなる子供も神の家である教会の敷地内や町で石や骨

（指骨遊びに使う）をガラスにむかって投げたり、ボールをそこにぶつけたりしてはならない。……それに対して子供の両親は五ストイヴェルスの罰金を支払うこと。」[注19]

確かにブリューゲルがウィーンの「子供の遊戯」を描いた一五六〇年代、すでにアントウェルペンは国際商業都市として繁栄し、人口も約十二万人を越え、ヨーロッパ屈指の大都会となっていた。ゆえに二百人以上の子供たちがこの画面のように広場を占領して遊び興じることは不可能であった。大人も子供も広場で思う存分遊ぶ世界に没入できたのは、せいぜい一月の御公顕節、二月ないし三月の謝肉祭、十二月のクリスマス、それに聖人の祝祭日を祝う縁日位だったのであろう。また子供たちの手作り遊具もいつの日か縁日で商人の売る人気玩具にとって代わり、また遊び自体も時代とともに変遷し、忘却されてしまうのであろう。実際、十七世紀中頃のオランダのタイル画にみられる子供の遊戯にも、すでにNo.9のナッツの穴あけ遊びやNo.12のガラガラ遊びのような手作り遊具は姿を消していた。その上、オランダはプロテスタントの国なので、もはや子供たちはNo.4のミサごっこ、No.77の宗教行列ごっこを知らないであろう。その意味でもブリューゲルが九十数種の子供の遊戯を描き残した歴史的意義は大きく、彼の作品はいわば絵で語られた〝年代記〟といってよいだろう。

ここで注目したいのは、マルティン・ルターが一五三〇年、四歳の長男ハンス宛に出した手紙の内容である。[注20]その中で彼は多くの子供たちが楽しく遊んでいる「奇麗ですばらしい庭園」について語っていた。「そこには沢山の子供たちが出かけるのですよ。みんな金のスカート（当時男の子もスカートをつけていた）をはき、樹の下でりんご、梨、さくらんぼ、すもも、桃を食べ、歌い、跳び、陽気になるのです。また金の手網と銀の鞍のある小馬をもっています。そこで私はその庭園の中の男に『この子供たちは誰なのですか』と聞きました。すると彼はこう云いました。『喜んで祈り、学び、教虔な子供たちです』と。そこで私はこう云ったのです。愛する人よ、私にもハンス・ルターという息子がいます。あの子

もこの庭にやって来て、こんなに美味しいりんごや梨を食べ、こんなに素晴しい小馬に乗り、この子供たちと遊ぶことができるだろうか』。すると彼はこう云いました。『もし息子さんが心から祈り、喜び、敬虔ならば、この庭にも来ることができます』と。」以上の文面から、子供の躾に対するルターの思想の一端が窺えるのである。彼は子供が進んで祈り、一生懸命学び、神を信じるならば十分に楽しく遊ばせてもよい、実際、そうした子供のみ楽園のような遊び場に行くことが許されると教育しているのである。

もうひとつ同時代のフランスの詩人ラブレーの『ガルガンチュア物語』にも注目してみよう。その第二十二章で主人公のガルガンチュアは詭弁学者の先生がたの監督のもとで、パリでの生活を始めるが、決して勉強三昧の生活を余儀なくされたのではなかった。若き主人公は朝食を終え、教会に出かけてミサを聴聞し、帰宅して小半時間も勉強した後、昼食をとる。その後、彼は「遊び」を許されるのである。そして列挙されたのが二一七種類の遊戯（一五四二年版）だった。思う存分遊んだ後、ガルガンチュアはお酒を飲み、二、三時間昼寝をする。その後、再び祈禱書を読み、晩食を済すや、双六などをして、夜食も食べ、就寝につく。このようにして、ガルガンチュアの日課には勉強とともに遊びも加えられていた。いやむしろ遊びも教育の一環と考えられていたと解すべきであろう。ラブレーの研究家ミハイール・バフチーンはこの遊戯の中に、「祝祭の民衆的・広場的側面と外面的なつながりだけでなく、内面的な本質的つながりを持っていた」と論じている。しかしバフチーンの解釈する「内面的な本質的つながり」とは遊戯のもつ寓意性で、例えば、トランプ遊戯を「イタリアをめぐるフランソワ一世、クレメンス七世、カルロス五世間の争い」であるとか、九柱戯のゲームは「地上の生活全体と、その無常、災厄」と解している。

さらにバフチーンは、遊戯がパロディ、もじり的占い、予言、謎歌の課題と同様に、中世的な観念のもつ終末論的な時を「良き陽気な時に変身させる」と、その積

極的意味を認めている。[注21] だがブリューゲルがはたしてバフチーンの解釈するような形而上的世界観をもって遊戯を描いたかどうか、筆者にははなはだ疑問に思える。

注1 フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』(杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、昭和五十五年)八十五頁。

注2 Mary Frances Durantini, *The Child in Seventeenth-Century Dutch Painting*, Michigan 1983, p. 186.

注3 William Harrison Woodward, *Vittorino da Feltre and Other Humanist Educators*, New York 1963, p. 247 (the first ed. 1897).

注4 *Ibid.*, p. 138.

注5 William Harrison Woodward, *Studies in Education*, Cambridge 1929, p. 175.

注6 Durantini, *op. cit.*, p. 186.

注7 アリエス、前掲書、八十六頁。

注8 G.G. Coulton, *Mediaeval Panorama*, New York 1957, に言及。Fitzstehpen は聖トーマス・ベケットの司祭で、氷滑りは *Descriptio nobilissimae civitatis Londoniae* に記されている。この資料は同志社大学教授斎藤勇氏から提供された。

注9 J. Weyns, *Bij Bruegel in de Leer voor honderd-een dagelijkse Dingen*, 1975, p. 21.

注10 「頭と尻」を Living Wheels の遊びと名づけたのは、Jacques Stella, *Games and Pastimes of Childhood* (英訳) の解説№34で、訳者 Stanley Appelbaum による。

注11 Jan Pluis, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, p. 173.

注12 Stella, *op. cit.*, No. 34.

注13 Claude Gaignebet, *Le Folklore Obscene des Enfants*, 1974, pp. 149–150.

注14 Elke M. Schutt-Kehm, *Pieter Bruegels d.Ä. "Kampf des Karnevals gegen die Fasten" als Quelle volkskundlicher Forschung*, *Frankfurt* 1983, p. 47.
著者はこの男の子が「豆祭り」の王に扮しているのではなく、むしろ聖ブラシウスの日(二月六日)に選ばれた子供の王ではないかと推定している。

注15 本連載第九回№57では「ガラガラ遊び」としたが、この鳴り物の音から「カタカタ鳴らし」の方が正しいので訂正したい。

注16 「謝肉祭と四旬節の喧嘩」にみられる民族楽器や鳴り物については、拙著『ブリューゲル』(世界の大画家)、中央公論社、昭和五十九年、七〇~七一頁参照。

注17 A. Forbes Sieveking, "Games", *Shakespeare's England*, Oxford 1932, p. 481.

注18 図版については、筆者の注16の前掲書を参照。

注19 J.W.P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel Vóór de Zeventiende Eeuw*, 's-Gravenhage 1914, p. 102.

注20 Klaus Arnold, *Kind und Gesellschaft in Mittelalter und Renaissance*, Paderborn 1980, pp. 181–182.

注21 ミハイール・バフチーン『フランソア・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』(川端香男里訳、せりか書房、昭和五十五年)二〇二頁~二〇九頁。

(明治大学)

☆書評

『自我のめばえ』

津守　真　著

岩波書店刊

友定啓子

この本は、ある一人の女の子の二歳の時のことをもとにして書かれている。第一章は、ある一日の生活について、第二章は、二歳から三歳までの一年間に起こったことについて、そして第三章は、それらの事実の中から、この時期に起こっている自我の形成についての理論である。このような構成をみると非常にスッキリした本のように思えるが、実はなかなか難しい本である。二歳児の一日がどうして難しいのかと言われそうであるが、まず冒頭の一文を紹介しよう。

幼い子どもが目を開いて、自分の周囲の世界に気がついたとき、そこにはすでに物があり、人がいる。子どもは、心ゆくまで、さわったり見たり動かしたりするうちに、次第にその物の性質や可能性を発見してゆく。それと共に、子どもは、自分ができることと、できないことを確認し、自分が何をしたいか、心の奥底で何

を望んでいるかを知ってゆく。それは、自分の活動を十分に追求することによってなされる。子ども自身が生み出す活動を、大人が承認し、共に参加し、喜び合うときに、それは相互の世界の現実となる。こうして子どもは、生れたときから、世界の中に生き、世界の理解を深めつつ、自己実現をし、活動を生み、現実をつくってゆく。

特に難しい用語もなく、読み過ごしてしまいそうなこの文章の中に、この書物における著者の思想の殆どが含まれている。子どもにとって世界とは何か、どのようにして世界と出会い、自分をつくっていくか、そのときの大人の役割、また自己実現によって世界を再構成していくことなどである。人間の内側に入りこまなければ理解しにくい文章である。

さて、この書物全体の印象を言えば、非常に魅力的だがわかりにくい、そしてわかりにくさを超えると、「重い本」だと言うことになる。平易な語り口で展開されているのにかかわらず、わかりにくい。それは一体何に起因するのだろうか。まず、対象としてとりあげられた二―三歳の子どもの世界そのもののわかりにくさがある。乳児期の目ざましい発達と、おだやかさを通りこして、それにかわって、意味のとりにくい自己主張、しかも大人の都合などおかまいなしに泣きわめき、怒り、ガンコになったり、憶病になったり、こちらも我を忘れてふり回されるそんな二歳の子どもの世界をそのままとりあげていること。二つ目には、幼稚園や保育園のような特別の場でなく家庭を舞台にしていること。日常のゴタゴタした、とるに足らないことのように見えるものの連続の中の保育であるということ。三つ目には、この中に登場する保育者が、明瞭な保育観を語らないこと。そして最後に、一つ一つの場面考察に特定の理論を用いないことである。これらを持ちこたえつつ読み進む人はこれらが、逆に本書の大きな

魅力になっていることと、その価値に気付かれることと思う。

二歳の子どもと一日つき合うと、肉体的にのみならず、精神的に疲れてしまうそんな二歳児なのだが、実は「ひとりの人間として自我の力がつくられる時期」であり、乳児時代の守られた存在から、はじめて外界と出会い、混乱し、とまどい、挑戦し、その中で希望や理想と出会い、それをさらに外界と統合させてゆく栄光と苦悩に満ちた日々なのだ、ということを示してくれる。それは、一日という単位の中でも、自己を実現し、自分に納得し満足する時間、混乱と不安におののく時間があり、一年という長い経過の中で見ると、より一層はっきり示されてくる。その生活の中で子どもははじめて自分自身の中心をさぐりあてていくのである。二歳の子どもの物のとりあいの際に示される激しい感情は、自我の喪失の危機を表わしているのだし、それらの危機を大人の助力で乗りこえ、長い混乱の中から、あこがれの少女を見い出し共にすごす日々、あるいはクリスマスツリーの輝きに未来を望み見る日々、そしてその後の長い苦闘を経て、自己の統合に至る二歳から三歳への世界、しかもそれが描画に表現されるということ、今さらのように子どもの内面世界の豊かさに目を見張らざるを得ない。このように示されると、突然に人格が現われてくるようにみえる三歳に至るまでの、二歳児に私達はもっとやさしくなれるような気がする。

本書のもう一つの大きな魅力は、このような幼児の内面生活を支える保育そのものにある。本書の中で保育者は、著者であり、夫人であり、年長の兄弟だったりする。朝、目覚めて出遅れたことに気付き不安定になった子どもに、「気持ちよく一日を出発させるように」「後からくる者が入りやすいように」と気を使う。避けられないきょうだいの葛藤、対立の中で共存のすべをさぐり、子どもたちがそれぞれ自己実現できるようにということを心にとめてつき

あう。子どもの自発性が発動するまでは、子どもの訴えや悩みに大人はよく耳を傾け、一たび発動したならば干渉はしない。一日一日、子どもの充実した生活をつくり上げてゆくという保育である。このように記してしまえば、定まっているような印象を受けるが、実際には一瞬一瞬動いていて、子ども達の傍におりながら、矛盾に満ちた子どもの世界をまるごと引き受け、その中で、個々の子どもの自己充実を援助しつつ、その場をつくる人となる。そこにあるのは一貫した存在肯定とありうる限りの子どもへの共感ということである。

倉橋惣三は、「幼児の生活それ自身の自己充実に信頼して、それをできるだけ発揮させて行く」ことに保育法の第一段がある、と述べているが、まさにそれに徹しているとも言えよう。

この保育が幼児の人格形成とどのようにつながって行くかが、本書の第三章において展開されている。このように他者（大人）の援助を受けながら自己活動を展開し、自らの心の願いを実現していく。子どもは自己実現による充実した活動ができるようになると、そこから他者への関心が生じ、それが内なる（自己）抑制力として働く。ひとたび、他者の存在に深い関心をもった人間は、他人を無視してわがままを通すことはできなくなる。他人の感情や考えに対して敏感になる。そして他人をよろこばせ、他人の期待にそうように振舞おうとする。……自分が他者に吸収されるのではなく、また自己につごうのよいように他を同化するのでもなく、真に他者に出会うのは、自己実現の過程における、自己の追求の努力においてである。幼児期に、幼児の自己実現の生活がなかったならば、その後の自己の探求もまた危うくされる。……このように第三章において、自我論と保育論がきり離せない形で、その後の児童期・青年期・成人期へとひきつがれている。このあたりにくると、保育学というよりは人間学、あるいは哲学書の様相を帯びてくる。

本書において、どうしても問題にしておかねばならないことが一つだけ残っている。すなわち、第三章に至る第一、第二章における著者の考察方法である。例えば、二歳の子どもがきょうだいより遅れてめざめた。出遅れたと感じて泣きそうになる、という記述がある。なるほど、幼児にとっては朝起きた順番が、その日一日を左右するほどの重大事だったのか。しかし、こんな事例は、つまり寝起きの悪い子の話は今に始まったことではない。だけれども、誰もそれを「出遅れたという挫折感」で説明しなかった。そうすると、なぜ著者だけがこれに気付いたか、ということになる。なぜ我々凡人は同じ事実を毎朝見ていながらそれに気付かないのか。著者曰く「どのような考えや先入観にもとらわれないで、いま起ることに対して素直な感受性をもって心を開いて生きる」と。しかし、著者は同時に、こんなに素朴に見える考察について、こう述べている。「あらかじめ定めたひとつの視点からでなく、多様な現象に即して多面的に考察を試た」あるいは「子どもの活動や行為をできるだけありのまま見て考えてゆきたい」と。すなわち保育としてはきげんの悪い子どもの感情に素直に共感して共に生きて行くことができる。ただ、その意味については、あれこれの多面的考察の後、結局、目の前にある素朴な事実を見つめることになった、ということになるのだろうか。つまり、そのことをことさらに言わねばならぬ程に、我々大人は小さな子どもの行動の素朴な意味をはかりかね、共感できない状況にあるということだろうか。

かなり、かたい紹介になってしまったが、最後に一言、小さな子どもと共にある方は、この本を読みながら、ずいぶん寄り道ができると思う。「特殊な子どもの特殊な一日」を読みながら、こんなにも共鳴してよく似た事実が次々と出てくるものか、と驚いてしまう。そして自らの保育を問われつつ、希望をも与えてくれる書物である。

（山口大学）

園児たちの〝家出〟

蕪木寿江

昨日が父観参観日だったので今日は代休……月曜日がおやすみなのも不思議な気がします。家の前を他の幼稚園のバスが行ったり来たりする中で、自分だけが異なった静止の世界にいるような感じがします。

小包みを作って郵便局に持って行こうと家を出ました。サイクリングコースにかかっている橋を過ぎて狭いガードレールにさしかかると、向うから水色のスモックを着た三人の男の子が一列に歩いてくるのに出合いました。

幼稚園の年長さんだな、とすぐに分りました。

「どうしたの？」と声をかけると、「家出してきたんだよ」と三人が胸を張って答えました。

十時を十分過ぎていたでしょうか。不審そうな顔をして見る私に家出してきたんだよ、O幼稚園はいじわるなんだよ、朝からワークブックばかりやって、僕がちょっ

と、ちょっとだよ、外で遊んでいたらお部屋の鍵をしめちゃったの」と、訴えるように話し続ける子ども達について、逆戻りをして一緒に歩きました。

「でもね、先生が心配しているから帰りましょうよ」

「あったりまえでしょう、大人なんだもの——」

「……心配してるわよ、ね」

「帰らないよ、家出してきたんだもの」

時々うしろを振りむきながら話す子ども達の顔は、ますます輝いて見えました。

その幼稚園からここまでは三キロ余りあるところです。一時間はゆうに歩いています。その上まだ駅まで歩くというのです。駅までは二キロ近くあります。

駅にはお母さんが待っている、この道はいつも幼稚園バスが走るから分ることなど、代る代る話します。

「三人共同じ所なの？」

「ううん、この子はT駅なの」

「T幼稚園はいいんだよ、給食がなくてお弁当なの」

「O幼稚園なんか時間がいっぱいかかっても、給食全部食べないと許して貰えないんだもの、お弁当の方がずっといいよ、なあ——」

「ずっとハいよ、T幼稚園に行けばよかった」

この子が三人の中で一番ひ弱な感じがするのに、はっきりと主張するのです。

「ねえ、帰りましょう、先生が心配してるわ」

「だっておばさん、そう思わない、いじわるしたんだもの、家出したっていいでしょう」

背も高くがっちりしていて一番早い生れではないかと思う子が、堂々とした態度で言い切りました。

「でもね……ねえ、車で送って行って頂くからね」と、丁度家の前まで来た時に、白い車がさーっと止まり、中からとんぼ眼鏡の若い先生が降りて来ました。

「先生の勘が当ったわ、もう出ちゃ駄目よ」と、ガッツポーズの片手をあげて、さっさと三人を車の中に入れました。

自信に満ちた子どもらしい表情が一瞬のうちに消えて、一言もしゃべらず黙って乗りました。

「受持の先生ですか、ご心配になったでしょう」と言うと、受持が気付くのが遅かったんで、私が車の運転ができるのでと、悪気もなく、子ども達に逢えた安堵の明るい口調でした。

「子どもの生活は遊びですから、沢山遊ばせて貰いなさい」これが精一杯の私の叫びでした。

車を見送りながら、「あの先生に、倉橋惣三選集をお貸しすればよかった、そうだ周郷博著作集もお渡しすればよかった」などと悔みながら、呆然として立ちすくんでいました。この先生は、私が幼稚園の先生だとは勿論思わなかったでしょう、今もご存知ないことでしょう。

「人間として生を受け、人間として死ぬることのできる人間の社会をつくっていく基礎である、土壌である、本当の幼児教育を求めて共に勉強していきませんか」と、その幼稚園宛に手紙を書くんだと興奮していましたが、実行しないままになっています。O幼稚園のバスを見る度に、あの三人がどこに乗っているかな、どんな顔してるかな、と、ついつい背伸びをして覗きたくなってしまいます。

（神奈川・市が尾幼稚園）

幼児の教育　第八十三巻（昭和五十九年度）

総目次

◆一号

魅せられるもの―一九八四年、いま、ここに―　河辺　杲

保育の原点をさぐる　三宅　廉

新しい人よ眼ざめよ―絶望の時代に希望を見る―　本田　和子

日本におけるスポーツの夜明け―日本の女子陸上界・硬式テニスを中心に―　平野　久子　福田富美子

いろいろなことを教えてくれる子どもたち①　村石　京子

赤本「鼠の嫁入」にみる教育的位置と多様性　森下みさ子

子どもの作文から　倉橋賞受賞研究―幼稚園における障害幼児の集団適応の研究―　平岩定法・他

◆二号

就職シーズンに思うこと　佐藤　文子

なぜ「みんないっしょ」なのか―望ましい幼児教育への問い―　伊藤　隆二

韓国幼稚園教育（一）―創立期の特性―　李　相琴

幼がたり―流れと雑魚―　川崎　千束

しもやけ　豊田　一秀

管見・フランスの子どもの世界―規範のしつけの問題を中心に―　宮島　喬

子どもの作文から

閉じた世界が開ける体験　津守　真

近代短歌に現われた子ども（十六）　大塚　雅彦

◆三号

遙けきかな……　日名子太郎

幼少時の談叢　山西　貞

近代短歌に現われた子ども（十七）　大塚　雅彦

穴の向うの世界　立川多恵子

韓国幼稚園教育（二）　李　相琴

まわるものへの関心　津守　真

いろいろなことを教えてくれる子どもたち②　村石　京子

子どもの作文から

遺伝と環境―D・フリーマンのM・ミード批判に寄せて―　足立　寿美

ニュージーランドにおける就学前教育の歴史ならびに現状（五）　松川由紀子

◆四号

これからの子どものために　関口はつ江

私の幼児教育論―子どもの文化としての音楽と遊び―　永田　栄一

園長室の窓から　市原　豊子

写真に寄せて　阿久澤栄太郎

年少讃歌―Sちゃんに―　藤本美穂子

私の保育―春に想うこと―　江口　明子
韓国幼稚園教育（三）―戦後の動向―　李　相琴
研究会に参加して　守永　英子
昔話への招待①―「瓜姫」の昔話をめぐって―　上野　泰子
ニュージーランドにおける就学前教育の歴史ならびに現状（六）　松川由紀子

◆五号

子どもの心をらくにする保育を　秋山　和夫
穴の向うの世界（Ⅱ）　立川多恵子
雛祭への提言　石沢　誠司
私の保育　藤塚　岳子
園長室の窓から　市原　豊子
細く長く続けるということ―遊びを見つめる会―　入江　礼子
いろいろなことを教えてくれる子どもたち③　村石　京子
私の娘　三上　祝子
写真に寄せて・下萌　阿久澤栄太郎
ニュージーランドにおける就学前教育の歴史ならびに現状（七）　松川由紀子
倉橋賞受賞研究―事故頻発傾向児に関する研究―　植屋　悦男

◆六号

幼児の活動　神沢　良輔
私の幼児教育論　松平　信久
園長室の窓から　市原　豊子
カメの実像と虚像　千石　正一
「人見知り」再考　小川　清実
写真に寄せて―下萌―　阿久澤栄太郎
「幼児教育の基礎理論」を翻訳して思うこと　森上　史朗
絵本をめくる紙一枚向うの幻想　森下みさ子
三歳未満児の探索活動　穴への関心　今井　和子
ニュージーランドにおける就学前教育の歴史ならびに現状（八）　松川由紀子

◆七号

幼児教育に対する期待と不安　太田　次郎
教育改革にのぞむもの一言　堀合　文子
幼稚園教員免許の改正案　岡田　正章
「しつけ」の理論について　波多野完治
いろいろなことを教えてくれる子どもたち④　村石　京子
＜子どもと環境＞
くらしに顔を出した小さな動き、大きな動き　泉本　晋一
父とまんとみ幼稚園　近藤千恵子
児童公園・遊園をめぐって　植田　敦子
階段のある園舎と子ども　黒田　成子
幼児施設の計画視点　小川　信子
近代短歌に現われた子ども（十八）　大塚　雅彦
ニュージーランドにおける就学前教育の歴史ならびに現状（九）　松川由紀子

◆八号

豊かな時代に生きる知恵が未来をひらく　清水美智子
特集・夏休み緑蔭図書招介
鬼頭　宏・木岡　昭子・伊藤　順子
館　かおる・中村　弓子・渦岡　謙一
ブリューゲルの「子供の遊戯」13
西洋美術史にみられる〝子供の遊戯〟小史　森　洋子
小さなできごとから　松井　とし

神賀忠吾氏の世界(Ⅰ)　江波　諄子

◆九号

専門職としての保育者　高橋さやか

本当の引っ越しまでの「大きなおまけ」　赤羽美代子

私の保育　田口　玲子

歌の中から　長谷川冴子

園長室の窓から園長と移動　原口　純子

養護学校の日日　学年末から新学年度へ　津守　真

いろいろなことを教えてくれる子どもたち⑤　村石　京子

私の幼児教育論　鏡のたわむれの中で、ひとは無限に表面にいる　亀井観一郎

アメリカと日本の幼児教育を見学して　劉　青霞

兎園随筆①　黄色い兎　蕪木　寿江

ニュージーランドにおける就学前教育の歴史ならびに現状（十）　松川由紀子

◆十号

これからの幼児教育　河野　重男

私の幼児教育論（上）　高杉　自子

私の保育　鈴木　知子

〈子どもと衣服〉

園服再考　入江　礼子

子どもが園服を脱ぐ時　宮里　暁美

園服史におけるエプロン点描　森下みさ子

幼稚園の制服　田中三保子

兎園随筆②　幼稚園の制服　蕪木　寿江

神賀忠吾氏の世界（Ⅱ）　江波　諄子

宗教人類学からみた子ども(1)　怪物の話　関　一敏

近代短歌に現われた子ども（十九）　大塚　雅彦

◆十一号

「キンケシ」または本物体験のこと　間藤　侑

宗教人類学からみた子ども(2)　空に何ものかの現われる話　関　一敏

近代短歌に現われた子ども（二十）　大塚　雅彦

昔話への招待　なまけ者　讃　大澤　京子

兎園随筆③―確かさのむこう―　蕪木　寿江

シンポジウム　倉橋惣三の人と思想　津守　真・宍戸健夫　李　相琴・本田和子

◆十二号

みえない世界のことを　河辺　杲

詩　こんなにも　矢崎　節夫

私の幼児教育論（下）　高杉　自子

園長室の窓から　原口　純子

いろいろなことを教えてくれる子どもたち⑥　村石　京子

近代短歌に現われた子ども（二十一）　大塚　雅彦

保育実習生のノートから①　ブリューゲルの「子供の遊戯」14　森　洋子

書評『自我のめばえ』　友定　啓子

兎園随筆④―園児たちの家出―　蕪木　寿江

第八十三巻総目次

一九八四年も最終号を迎えた。雑誌の凋落が著しく、本誌もその例外ではない。しかし、とにもかくにも、一年の歩みを終えた。

この一年、教育の世界は、必ずしも、よい方向にのみ動いていたとは言い難い。教員養成に関する再検討、あるいは教育要領改訂への始動、そして臨教審の設置など、公に主導される様々な改革案は、そもそも、何を志向し、何をはらんでいるのだろうか。公の側が改革に熱意を示すときは、それだけ現行秩序が脅かされ、危機感が高まっていることの徴であろう。関係者一人々々の善意を超えて、それは、現行秩序の維持に奉仕する動きである。そして、私ども「大人族」は、よくも悪くも、現行秩序の側に属していることを忘れてはなるまい。公の動きに加担するにせよ、それを批判して異を唱えるにせよ、あるいは無関心であるにしても、それらはいずれも、現行秩序の体系に、既に組み込まれ、一つの位置を獲得した者の立場からなされる営為なのだ。「教師」といい、あるいは「母親」というも、すべて現行秩序の中で公認された「ポジション」であり、「役割」であることは自明なのだから。

子どもたちが、秩序の枠組から自ずから逸脱し、その特有の生を自在に紡ぎ出す存在であるとすれば、私ども大人は、明きらかに彼らとは異なった岸辺に佇んでいる。とすれば、私たちは、メディエーターなのだろうか。私たちの営みは、みずからの身体を介して、この両者を「とりなそう」とすることかも知れない。

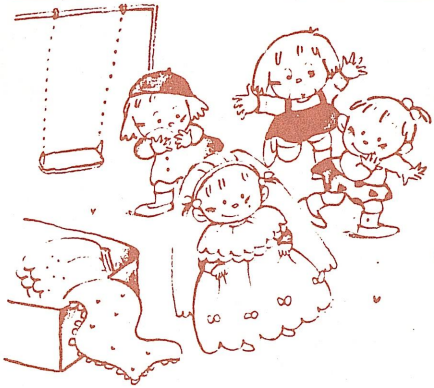
私どもの存在そのものを、時々刻々、活性化し新しく蘇らせることの意義は、ここに見出される。本誌が、新しい年も発刊を続けようとすることの意義も、恐らくは、ここに求められるであろう。(H)

幼児の教育　第八十三巻　第十二号
十二月号　©
定価三〇〇円
昭和五十九年十一月二十五日　印刷
昭和五十九年十二月　一　日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本　田　和　子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番

◉本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします
※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

幼児のための発表会その準備と進め方

館　紅・著



子どもの小さな遊びから、劇遊びへと展開させるコツがよく分かる。

本書は、子どもと「発表会」に取り組む先生のために、発表会の基本的な考え方、出演種目の決め方、脚本の選び方、スケジュールの立て方、保育者同士の協力のしかたを詳説してあります。
☆著者脚色の脚本を９編紹介。

Ａ５判・216頁・定価1,500円

保育イラストブック

絵／江川厚子・奥谷ます子・冬野いちこ・ふじたひでみ　フレーベル館 編

**園だよりのアシスタント！
楽しいイラストがどのページにも！**

- ルーズリーフ式で原稿作りがスピーディにできます。
- やさしい線画で、色ぬりもできます。
- オリジナルイラストのヒントにもなります。

Ａ５判・104頁・ルーズリーフ式・定価1,600円

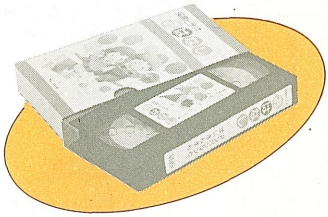
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心を大切に　子どもの明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

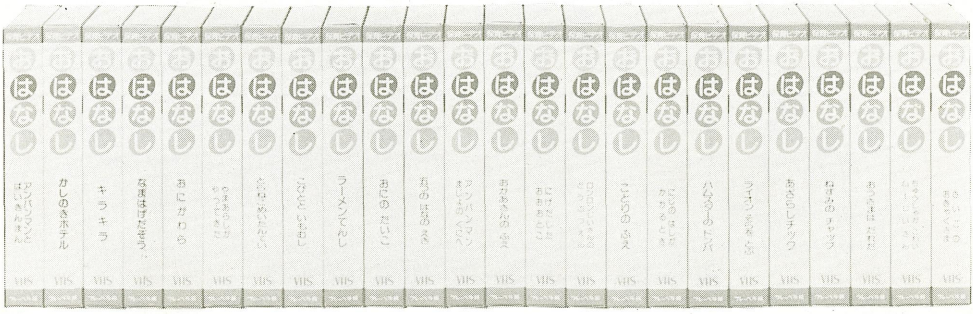
大好評の保育ビデオ、全セット遂に完成。

おはなし

保育ビデオ
全 24 巻



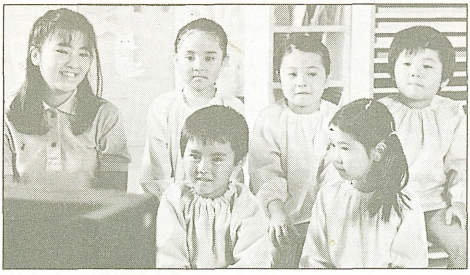
全24巻堂々完結！



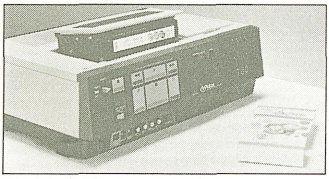
勇気、友情、冒険そして……

今や、子どもたちの人気の的。夢ひろがるアニメーションです。

各集２巻１セット　￥25,000



集	タイトル	
第１集	アンパンマンとばいきんまん	かしのきホテル
第２集	キラキラ	なまはげだぞう
第３集	おにがわら	やまあらしがやってきた
第４集	とらねこめいたんてい	こびとといもむし
第５集	ラーメンてんし	おにのたいこ
第６集	五つのはなのえき	アンパンマンまじょのくにへ
第７集	おかあさんのふえ	にげだしたおおおとこ
第８集	ロンロンじいさんのどうぶつえん	ことりのふえ
第９集	にじのはしがかかるとき	ハムスターのドンパ
第10集	ライオンそらをとぶ	あざらしチック
第11集	ねずみのチャップ	おうさまはだれだ
第12集	ちゅうしゃのこわいムーじいさん	さいごのおきゃくさま



VTRは美しい映像とうるおいのある環境を作ります。

ビクタービデオカセッター
BR-7110 ¥139,800

やっぱり、ビクター。鮮やか、簡単、安心、3拍子そろった有能ビデオです。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

0-39 A

子どもの心を大切に　子どもの明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館